

大分県文化財調査報告書 第144輯

国道197号大分南バイパス道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

真 萱 遺 跡 群

2002年

大 分 県 教 育 委 員 会

国道197号大分南バイパス道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

真 萱 遺 跡 群

2002年

大 分 県 教 育 委 員 会

序 文

真萱遺跡のある大分市松岡地区は、今なお豊かな自然に恵まれた農村景観が色濃く残る地域です。この地に国道197号大分南バイパス道路改良工事が計画され、それに伴う発掘調査を実施してきました。

遺跡からは、中・近世以降の区画溝や掘立柱建物跡などが確認されましたが、これらは松岡地区の開発史を考える上で重要な資料となるものです。

本報告書を、地域の歴史を記録した一資料として、埋蔵文化財に対する保護・保存並びに教育学術の普及・啓発に活用いただければ幸いです。

最後に、この調査に御協力いただきました関係各位に対して心より感謝申し上げます。

平成14年3月29日

大分県教育委員会教育長

石 川 公 一

例 言

1. 本報告書は、平成11、12年度に実施された大分市大字松岡所在の真萱遺跡群発掘調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は国道197号大分南バイパス道路改良工事に伴い、大分土木事務所の依頼により、大分県教育委員会が実施したものである。また、平成13年度は発掘調査報告書作成に向けての整理作業を行った。
3. 遺跡の現場実測は、主に調査員が行ったが、第1次調査のC・D・F区については埋文サポートシステムに委託し実施した。
4. 遺構写真については、各調査員によるが、空中写真撮影についてはスカイサーベイに委託した。
5. 遺物の実測、トレースは、文化課文化財資料室の整理補佐員が行い、写真撮影は文化課職員が行った。
6. 出土遺物及び関係資料は大分県教育庁文化課文化財資料室で保管している。
7. 本書の執筆・編集は、井川泰成が行った。

本文目次

第I章	はじめに	
1	調査に至る経過	1
2	調査団の構成	1
第II章	地理的・歴史的環境	2
1	地理的環境	2
2	歴史的環境	2
第III章	調査の概要	5
	向原西地区	5
1	溝状遺構	5
2	掘立柱建物跡	14
3	土坑	22
	カヨウ地区	28
1	溝状遺構	29
2	掘立柱建物跡	30
	真萱の上地区	31
第IV章	まとめ	31

挿図目次

第1図	真萱遺跡群周辺遺跡分布図	3
第2図	真萱遺跡群位置図	4
第3図	向原西地区1・2号溝実測図	5
第4図	向原西地区1号溝土層実測図	5
第5図	向原西地区1号溝出土遺物実測図	5
第6図	向原西地区1号溝土層実測図	5
第7図	向原西地区3～7号溝実測図	6
第8図	向原西地区3・4号溝出土遺物	6
第9図	向原西地区4号溝土層実測図	6
第10図	向原西地区遺構配置図	7～8
第11図	向原西地区8号溝及び土層実測図	10
第12図	向原西地区8号溝出土遺物実測図	11
第13図	向原西地区9～11号溝土層実測図	12
第14図	向原西地区9・10号溝出土遺物実測図	12
第15図	向原西地区9～11号溝実測図	12
第16図	向原西地区10号溝土層実測図及びD区基本層序	12
第17図	向原西地区12～14号溝実測図	13
第18図	向原西地区12号溝土層実測図	13
第19図	向原西地区建物1・2実測図	14

第20図	向原西地区建物 3・4 実測図	15
第21図	向原西地区建物 6 出土遺物実測図	16
第22図	向原西地区建物 5・6 実測図	16
第23図	向原西地区建物 7・8 実測図	17
第24図	向原西地区建物 9・10 実測図	18
第25図	向原西地区建物 11・12 実測図	19
第26図	向原西地区建物 13・14 実測図	20
第27図	向原西地区建物 15～17 実測図	21
第28図	向原西地区 1 号土坑実測図	22
第29図	向原西地区 2 号土坑実測図	22
第30図	向原西地区 3 号土坑実測図	22
第31図	向原西地区 1 号・3 号土坑出土遺物実測図	23
第32図	向原西地区 3 号土坑出土遺物実測図 1	24
第33図	向原西地区 3 号土坑出土遺物実測図 2	25
第34図	向原西地区 3 号土坑出土遺物実測図 3	25
第35図	向原西地区 3 号土坑出土遺物実測図 4	26
第36図	向原西地区 3 号土坑出土遺物実測図 5	27
第37図	カヨウ地区遺構配置図	28
第38図	カヨウ地区 1・2 号溝土層実測図	29
第39図	カヨウ地区調査区内出土遺物実測図	29
第40図	カヨウ地区建物 1 実測図	30
第41図	真萱の上地区遺構配置及び遺物（礫も含む）分布図	31
第42図	真萱の上地区出土遺物実測図	31

写真図版目次

図版 1	C・D・F 区遠景、D 区全景
図版 2	9・10・11 号溝、F 区全景
図版 3	8 号溝 a・b 完掘状況、建物 6 柱穴内土錘出土状況、2 号土坑
図版 4	3 号溝掘削作業風景、1 号土坑遺物出土状況、カヨウ地区 1・2 号溝

第 I 章 はじめに

1. 調査に至る経過

大分市大字松岡に所在する真萱遺跡群の発掘調査は、県スポーツ公園へのアクセス道路の一つとして整備される、国道197号大分南バイパス道路改良工事に伴って実施した。松岡～毛井地区の工区については、平成10年度初めに県土木建築部より他の事業とともに分布調査依頼が県教育委員会文化課にあった。県文化課は分布調査を行い、本工区が遺跡存在の可能性が非常に高いため事前の試掘調査が必要な地区と回答した。これをうけて県事業担当部局の大分土木事務所は、用地買収などの条件整備の整った平成10年度末に試掘調査の依頼を県文化課に行い、県文化課が試掘調査を実施した。試掘調査の結果、溝や掘立柱建物跡などを確認したため、本調査が必要と判断した。

本調査は、平成11年5月10日～平成12年5月19日まで、用地の完了した所から4度にわたって順次実施した。

2. 調査団の構成

平成11年度

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	田中 恒治	大分県教育委員会教育長	
	山本 芳直	大分県教育庁文化課課長	
	田原 基之	同	参事兼課長補佐
調査員	清水 宗昭	同	課長補佐兼係長
	坂本 嘉弘	同	主幹
	高橋 信武	同	副主幹
	宮内 克己	同	副主幹
	井川 泰成	同	主任（調査・報告書担当）
	宮田 剛	同	嘱託（調査担当）
	五十川雄也	同	嘱託（調査担当）

平成12年度

調査総括	田中 恒治	大分県教育委員会教育長	
	山本 芳直	大分県教育庁文化課課長	
	伊藤 正行	同	参事兼課長補佐
	清水 宗昭	同	参事兼課長補佐
調査員	栗田 勝弘	同	主幹兼係長
	高橋 信武	同	副主幹
	井川 泰成	同	主任（調査・報告書担当）
	佐藤 勇次	同	嘱託（調査担当）

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

大分県最大の川である大野川は、犬飼町から大分市上戸次に至る狭隘な地形を抜けると、大分市中戸次、松岡、鶴崎にかけ、沖積平野を形成しながら北流し別府湾に注ぐ。真萱遺跡群は大野川左岸の鶴崎台地とよばれる洪積台地の東端に発達した河岸段丘の上に位置する。この段丘は、下位から松岡面、冬田面、横尾面とよばれている。沖積面は大野川と乙津川が流れており、これら河川の両側の丘陵から小河川が注ぐ。松岡面は砂礫層からなり、鶴崎台地南部の松岡地域に広く形成されている。冬田面は標高30～40mで円礫からなる砂礫層から形成され中位段丘の位置にある。高位の横尾面は鶴崎台地で最も広く広がる段丘面で、鶴崎台地の主体をなし、標高43～50mで上流にいくにつれ高くなる。一方沖積面に目を向けると、松岡付近で乙津川が分岐し、その他河道跡が様々に認められる。また、河道跡に沿い自然堤防の発達もみられる。その上には現在の集落が顕著にみられる。真萱遺跡群は標高約30～50mの冬田面から横尾面にかけて立地し、旧石器時代以降安定した地理的環境であったことがわかる。

2. 歴史的環境

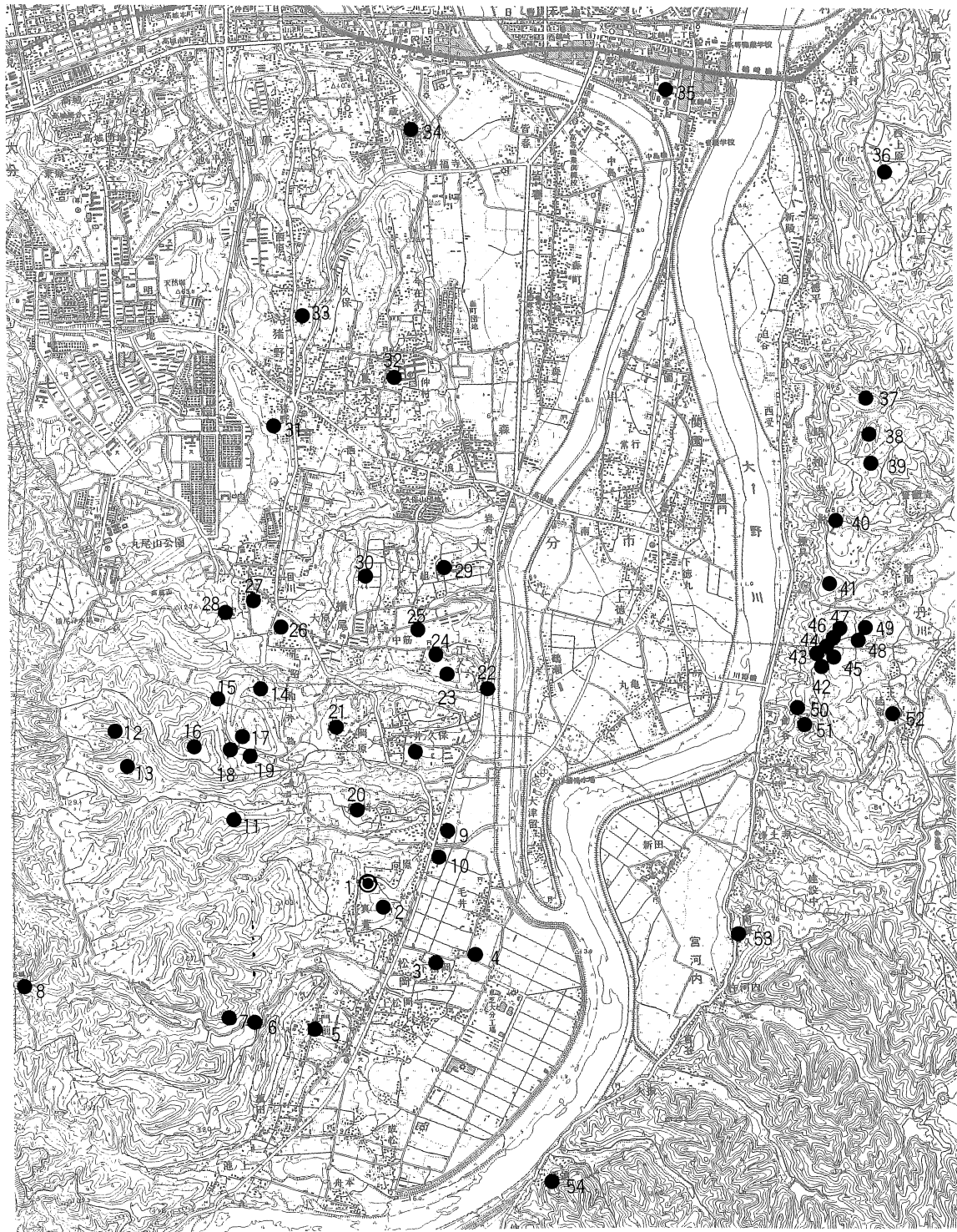
真萱遺跡のある大分市松岡周辺には、大野川の恵みを得て旧石器時代以降多く生活の跡が散在する。ここでは真萱遺跡群と関連する遺跡など、歴史的環境にふれてみる。

古代中央集権体制のもと、地方支配を進める上で交通体系の整備が重要になる。その中心が駅制であった。大野川右岸丹生台地には海部郡衙に比定される中安遺跡がある。そして近辺には丹生駅の存在も想定される。そのため、古代の官道がこの地域に置く説がある。この時期に関連するとみられる古代の遺跡としては、清水遺跡や上松岡遺跡、久保田遺跡などがあるが、鶴崎台地上のスポーツ公園建設にともなって発見された上牧ノ内Ⅰ遺跡や上牧ノ内Ⅱ遺跡は古代の土師質土器や須恵器がまとまって検出された。

中近世において、大野川沿いの毛井地区は、かつて毛井八幡社地頭職の平林氏支配下で津済となっていたことから、大野川の重要渡河点として官道に渡しが置かれていたことが想定される。近世になると日向道の要衝。さらに大分川と大野川の間位置する鶴崎台地側の渡河点としての松岡地域周辺と大分川の津守地区は古城山越えの道で結ばれていた。真萱遺跡群はこれらの主要道またはその裏道沿いにひらけた集落遺跡としての性格があると考えられる。

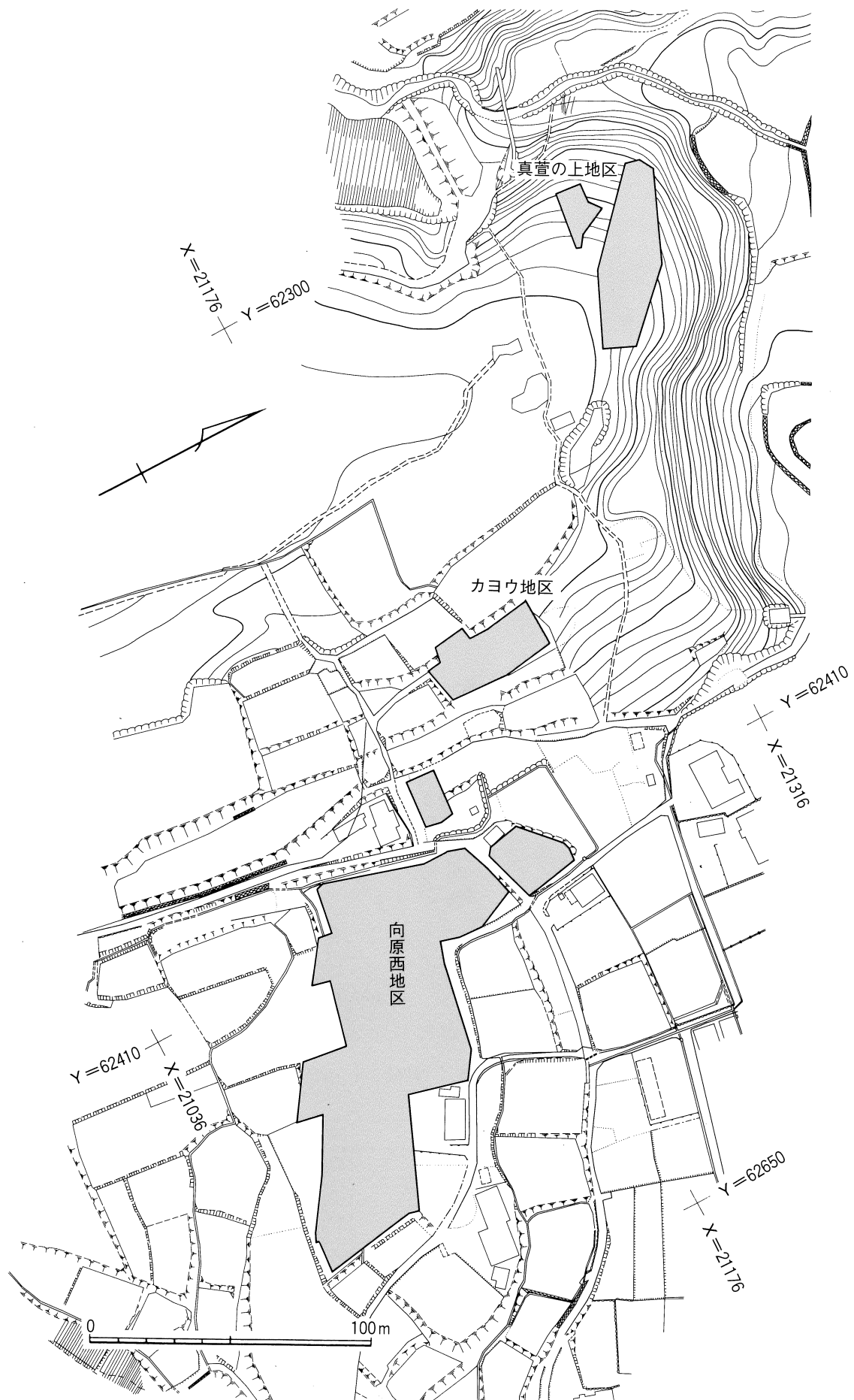
一方、松岡周辺を農地開発の歴史からみた場合、毛井地区周辺に代表される沖積地では大野川の氾濫との闘いの歴史であり、民家には今でも高く盛土をした水屋とよばれる倉が残る。しかし真萱遺跡のある松岡丘陵では昭和33年に昭和井路が完工するまで、畑作中心の様子があがえ、水田化をはかるための灌漑に苦労した歴史があることから、真萱遺跡の中・近世の溝状遺構と水田開発史との関連も注目される。

- 参考文献 「大分市史」(上) 大分市 1987年
「ふるさと松岡」 大分市立松岡小学校 1990年
「大分県の地名」 日本歴史地名大集45 平凡社 1995年



第1図 真萱遺跡群周辺遺跡分布図（「鶴崎」1/25000 国土地理院発行）

1 真萱遺跡群	12 上牧ノ内Ⅰ遺跡	23 有田遺跡	34 千歳城跡	47 野間古墳6号墳
2 真萱石棺	13 上牧ノ内Ⅱ遺跡	24 有田古墳	35 鶴崎御茶屋跡	48 野間古墳7号墳
3 毛井A遺跡	14 一方平Ⅰ遺跡	25 東中尾遺跡	36 上ノ原北遺跡	49 野間古墳8号墳
4 毛井B遺跡	15 一方平Ⅱ遺跡	26 二目川遺跡	37 丹生遺跡群	50 野間古墳9号墳
5 門前遺跡	16 一方平Ⅲ遺跡	27 二目川遺跡	41 丹生遺跡群	51 野間古墳10号墳
6 一の谷南横穴墓群	17 九池遺跡	28 水分神社銅矛出土地		52 延命寺遺跡
7 一の谷横穴墓群	18 論出遺跡	29 多武尾遺跡	42 野間古墳1号墳	53 阿蘇入横穴墓群
8 松岡城跡	19 牧ノ内遺跡	30 横尾下組遺跡	43 野間古墳2号墳	54 大内古墳群
9 清水遺跡	20 松岡遺跡	31 米良草遺跡	44 野間古墳3号墳	
10 久保田遺跡	21 岡原遺跡	32 葛木遺跡	45 野間古墳4号墳	
11 小平ノ辻遺跡	22 横尾遺跡	33 猪野遺跡	46 野間古墳5号墳	

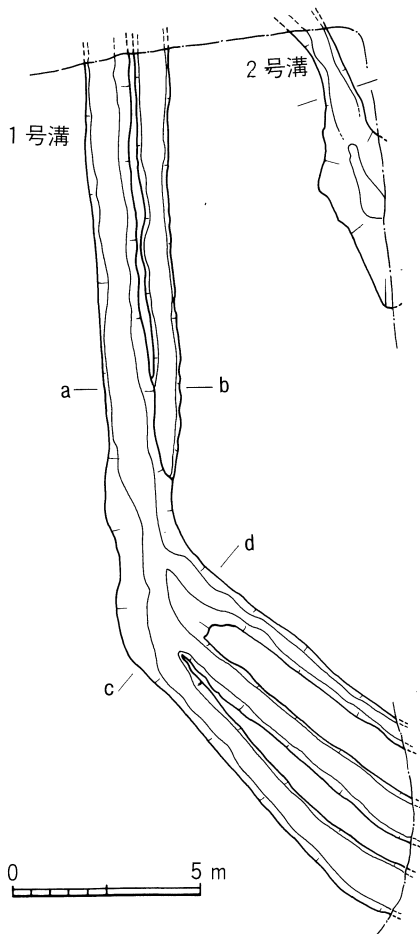
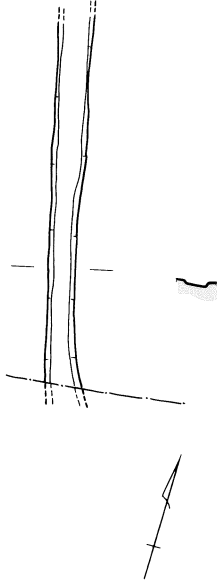


第2図 真萱遺跡群位置図

第三章 調査の概要

向原西地区

向原西地区は標高約30~35mの段丘面に位置し面積はおよそ6000m²である。現況は主に水田、畑、宅地であった。調査期間が連続しなかったため調査区が寸断される結果となったので、調査順ではなく便宜上調査区ごとにA~G区とした。遺構は溝状遺構14条、掘立柱建物跡17棟、土坑3基などを検出した。



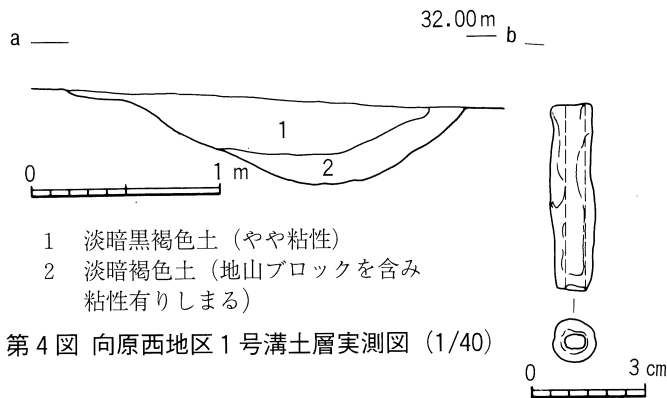
第3図 向原西地区1・2号溝(1/200)

1. 溝状遺構

1・2号溝 (第3図)

A、B区にまたがると思われる遺構である。A区では、検出面からは浅く、南方向にのびB区では2条の溝の重複がみられ、それが南東方向へさらに3条に分かれて調査区外へ続く。切り合い関係は東側の溝が西側の溝に切られている。また、3条に分岐する溝は南東へ曲がる内側から外側へ新しくなる切り合い関係がみられる。出土遺物は土錘1点で、管状土錘である。時期は不明である。

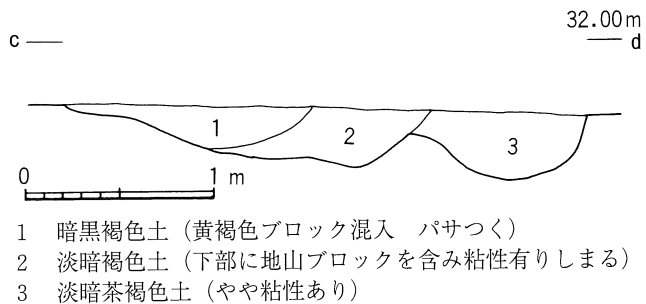
2号溝はA区からのびてきてB区で土坑状の窪みをなす。遺物はなく時期用途とも不明である。



- 1 淡暗黒褐色土 (やや粘性)
- 2 淡暗褐色土 (地山ブロックを含み粘性有りしまる)

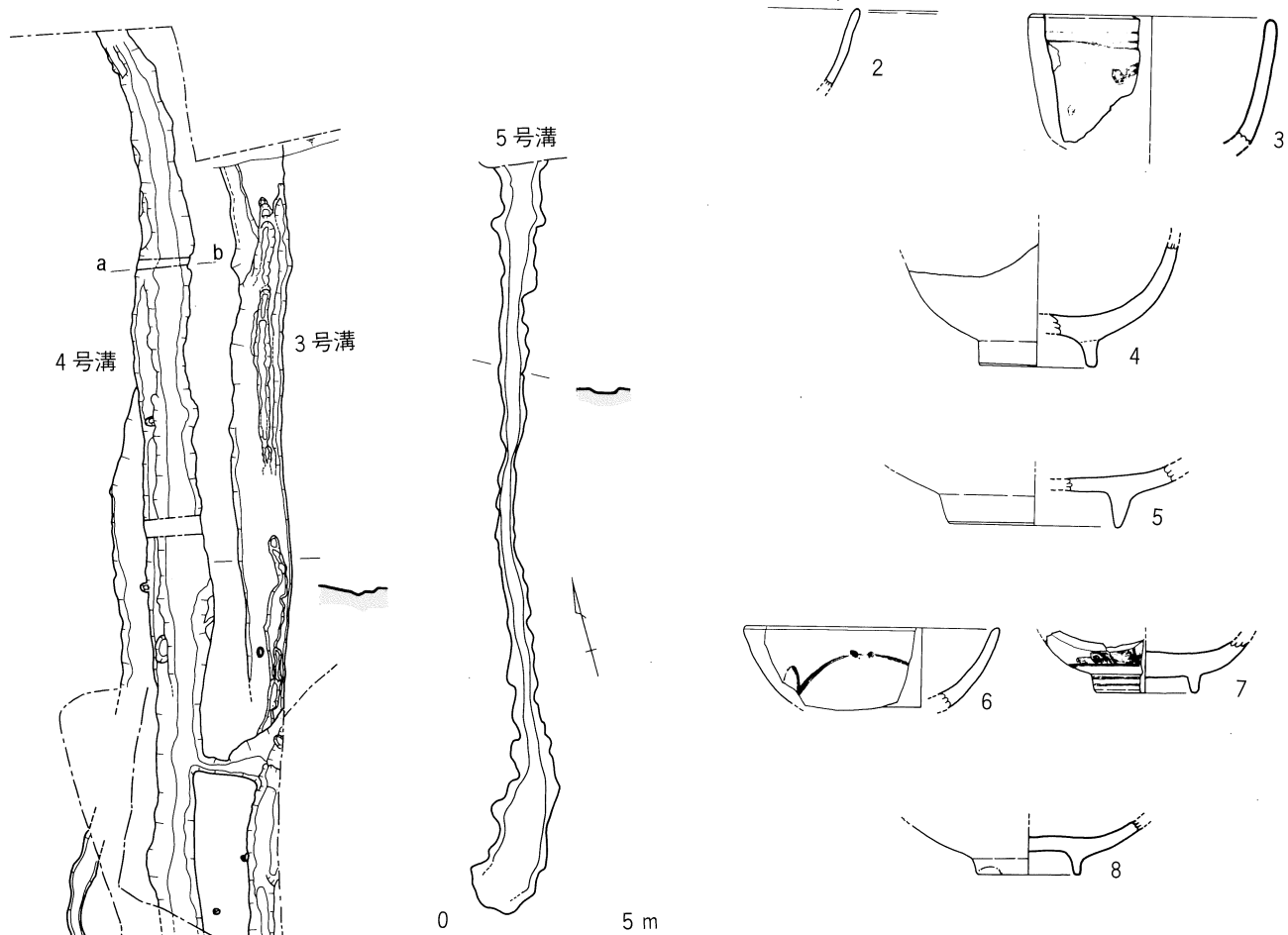
第4図 向原西地区1号溝土層実測図(1/40)

第5図 向原西地区
1号溝出土遺物実測図(1/2)

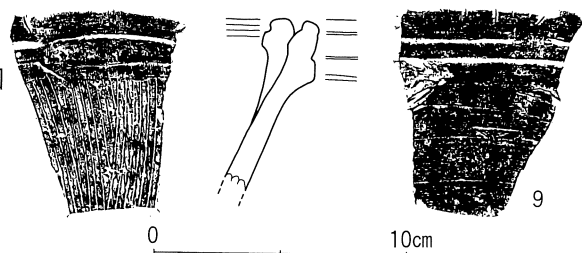


- 1 暗黒褐色土 (黄褐色ブロック混入 パサつく)
- 2 淡暗褐色土 (下部に地山ブロックを含み粘性有りしまる)
- 3 淡暗茶褐色土 (やや粘性あり)

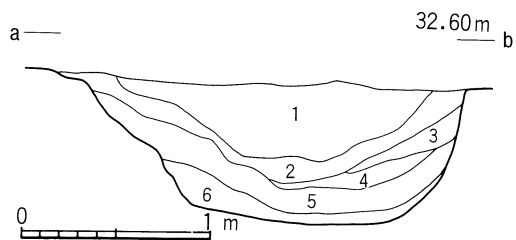
第6図 向原西地区1号溝土層断面実測図(1/40)



第7図 向原西地区
3～7号溝実測図



第8図 向原西地区3・4号溝出土遺物実測図(1/3)



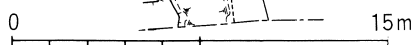
- 1 黒色土 (粘性が強くしまりは弱い、2～3mmの黄土ブロックを含む)
- 2 黄褐色土 (粘性は強くしまる)
- 3 黒褐色土 (粘性強くしまり弱い)

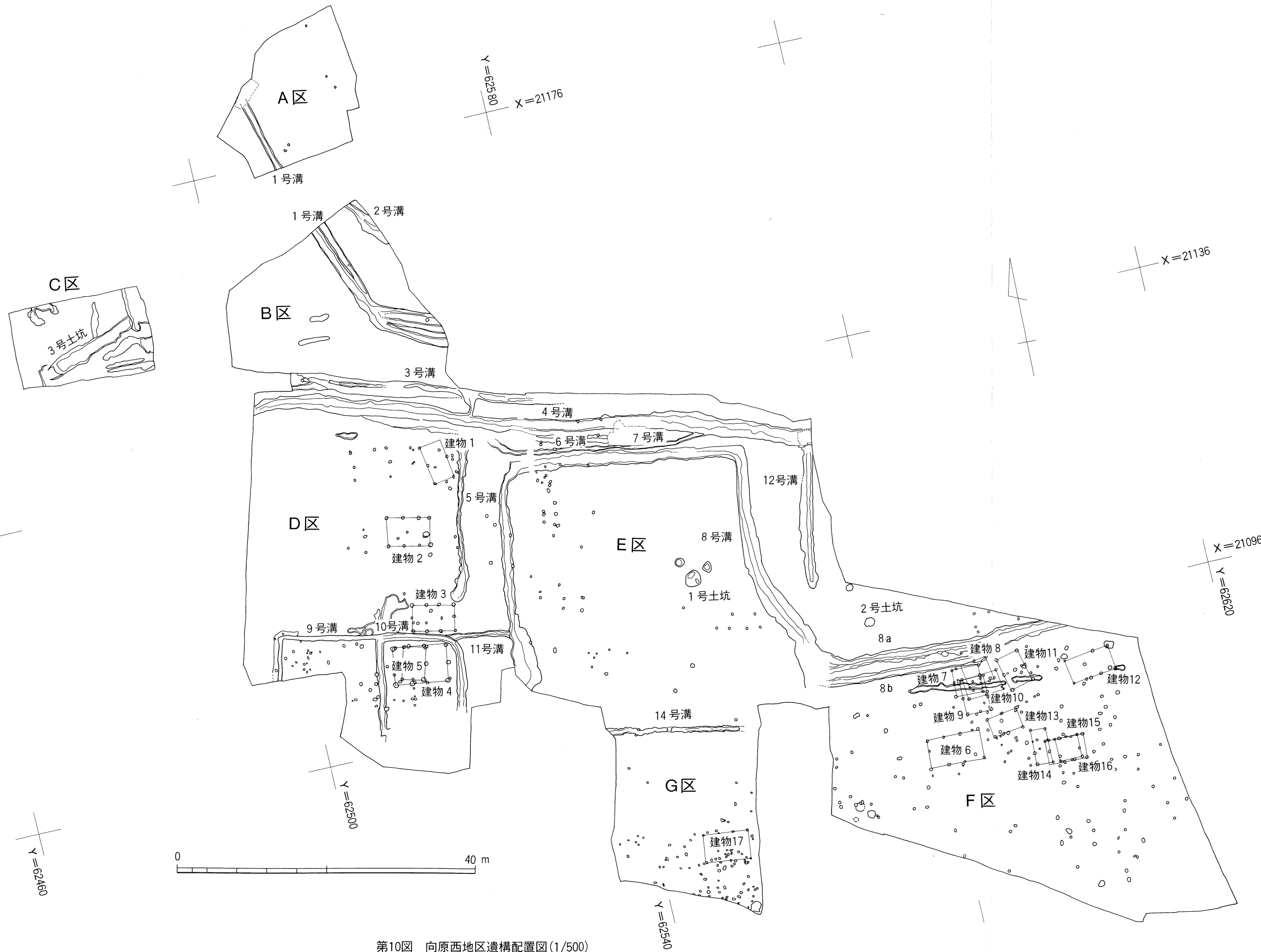
- 4 黒褐色土 (粘性は強く水分を多く含む)
- 5 灰褐色土 (粘性が強く2～3mmの小石を含む)
- 6 灰黄褐色土 (粘土層で水分を多く含む)

第9図 向原西地区4号溝土層実測図(1/40)

3号溝 (第7図)

C区南端で検出された浅い溝である。水田と水田を区画する里道の下から検出された。上流部に水源があることから、自然流路とも考えられる。東西に約30m検出し、その最大幅は2mで深さは最深で23cmである。遺物は、2は唐津系碗の口縁部片で17世紀後半のものである。





第10图 向原西地区遺構配置図(1/500)

3は陶胎染付碗の小片で18世紀前半の製品である。4は肥前系の京焼風陶器碗で19世紀のものである。以上3号溝は17世紀～19世紀にかけて利用された溝であると考えられる。

4号溝 (第7図)

D区・E区で連続して検出された溝で、東西とも調査区外に延びている。長さは約74m、検出面での最大幅は3.1m、深さは約56cmを測る。水が常時流れた跡があり3号溝同様上流の水源から水を引くために利用されたと考えられる。

出土遺物をみると5は流し釉を施した陶器鉢の高台部である。6・7は草花文様を染め付けた磁器碗の口縁部と高台部、8は青磁染付碗の高台部である。9は堺産の播磨鉢である。遺物の時期はいずれも18世紀後半以降である。したがってこの溝の時期の一端を18世紀後半におくことができる。

5号溝 (第7図)

D区内を南北に延びる溝である。検出面での長さ約20m、幅は40cm～1mで深さは20cmである。遺物の出土はなく、時期は不明である。軸が直交する建物2との関連が注目される。

6号溝 (第7図)

4号溝の南側に平行に走る浅い溝である。溝の東側延長部は建物の攪乱により消失している。検出した長さは約10m、幅80cm、深さは17cmである。出土遺物はない。

7号溝 (第7図)

D区とE区で検出された、長さ約29m、幅約40cm、深さ33cmのU字型を呈する溝である。6号溝と8号溝の間に位置し、東は4号溝に切られる。西端は不明である。出土遺物はない。

8号溝 (第10図)

本遺跡最大の溝である。D区からF区にかけてコの字状に曲がり、F区を東へ横断し調査区外へ延びる。水の流れた痕跡はなく、何らかの区画溝と思われるが囲まれたE区の区画の中からは建物等の関連する遺構は検出されなかった。D区内の南北長は30m、E区東西長約30m、同南北約32m、F区では34mを測る。深さは最深部で75cm、最大幅2.8mである。また、E区～F区内にかけて溝の付け替えが行われ、8-aの後8-bが掘られたことがわかる。8号溝は近世陶磁器は一点の出土もなく、土錘が9点、中世火鉢小片、備前焼の小片、銅銭などが出土していることから、存続時期の一点を中世におくことができる。

8号溝 土器出土遺物

(単位: cm)

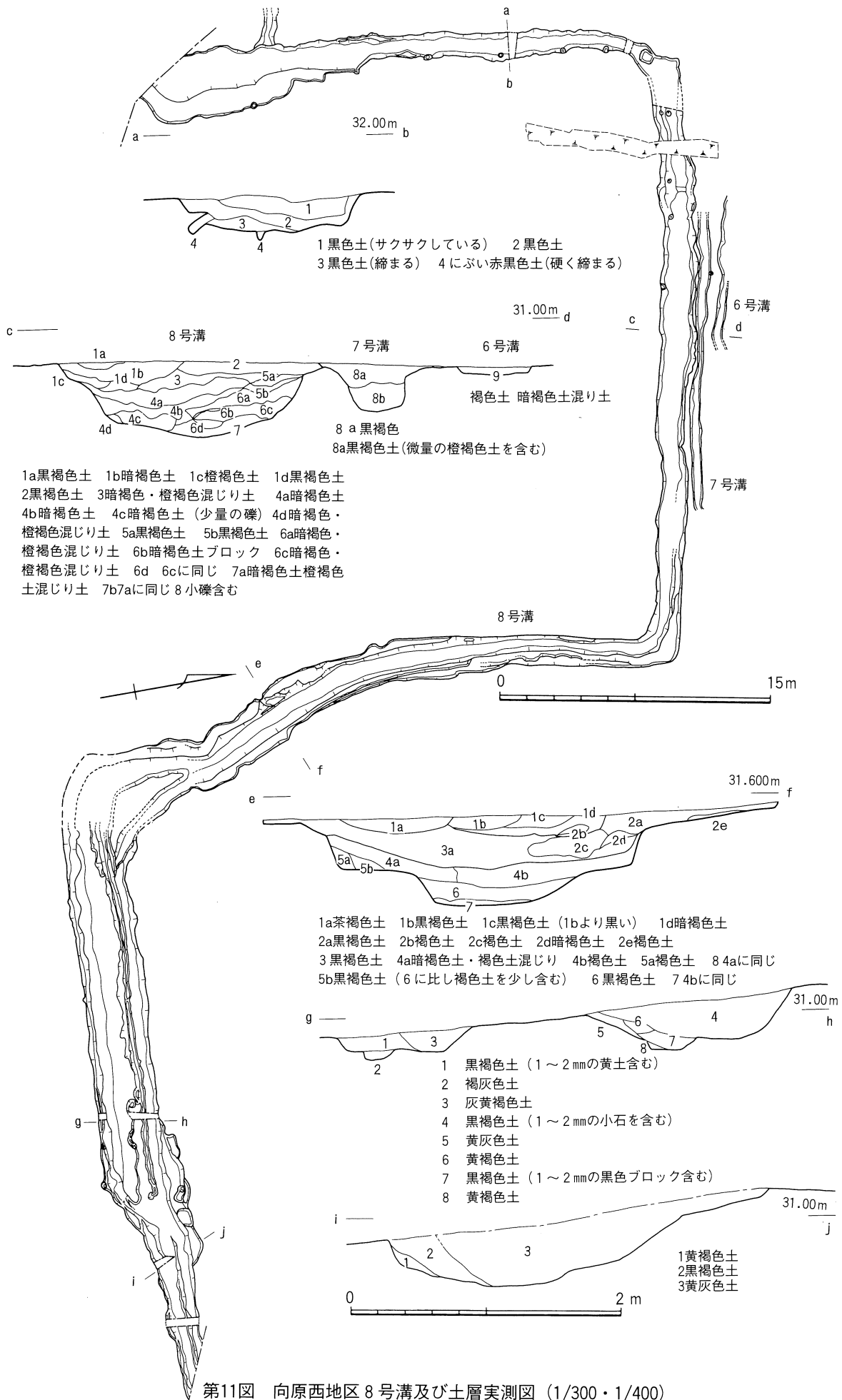
番号	器種	口径 器底 直径 高さ	胎土	色調	調整		出土場所	備考
					外面	内面		
10	皿	— — —	砂粒少 角閃石少 白色粒わずか	赤橙褐色	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ	D区	
11	皿	— — (11.4)	精緻	外: 赤褐色 内: 黒色	ヨコナデ 糸切り	回転ヨコナデ	F区8-a	
12	坏	— — 3.2 (7.0)	精緻	赤褐色	回転ヨコナデ 糸切り	回転ヨコナデ	F区	内面スス付着
13	火鉢	— — (20.8)	砂粒少 角閃石多 長石少	灰白色	胴部ヘラミガ キ後ナデ 底部ヘラケズリ	ナデ	E区	瓦質
14	火鉢	— — —	精緻	橙褐色			E区8-a	沈線3条+α

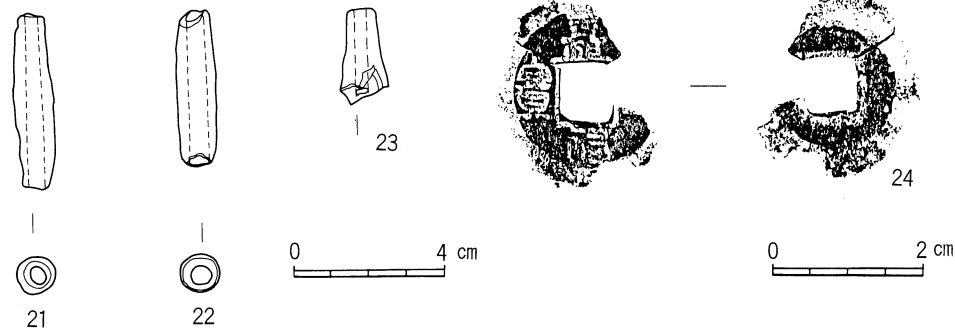
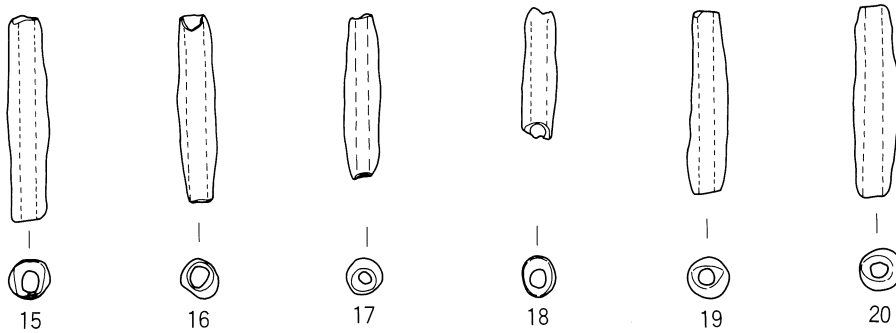
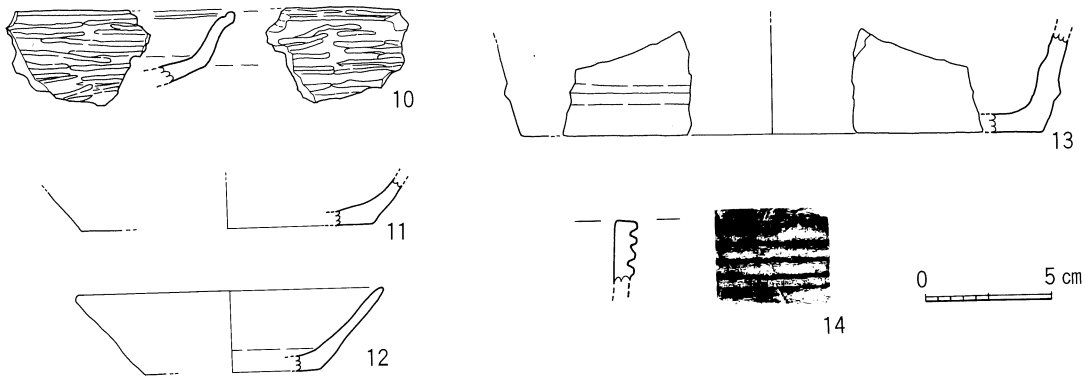
土錘観察表

番号	長さ(cm)	重さ(g)	最大径(cm)	胎土	色調	調整	出土場所	備考
15	5.4	3.5	1.1	角閃石 長石 石英	浅黄橙色	指圧痕 押さえ状のナデ	D区	完形
16	4.9	4.7	1.1	角閃石	灰白色	指圧痕 押さえ状のナデ	D区	完形
17	4.4	5.8	1.0	角閃石 石英	明赤褐色	指圧状ナデ	E区	完形
18	3.4	3.0	1.0	角閃石 石英	灰白色	ナデ	E区	ほぼ完形
19	4.9	5.5	1.1	長石 石英	赤褐色	押さえ状のナデ	F区8-a	完形
20	5	6.2	1.2	角閃石 長石 石英	灰白色	ナデ	F区8-a	赤褐色斑あり
21	4.6	5.0	1.1	石英	橙	押さえ状のナデ	F区8-a	完形
22	4.1	3.9	1.1	角閃石 長石 石英	浅黄橙色	ナデ	F区8-b	ほぼ完形
23	2.6+α	3.3	1.4	精緻	褐灰色	ナデ	E区	1/2残存

銅銭観察表

番号	銭貨名	残存状態	国名	初鑄年	書体	銭径	内径	厚み	材質
24	嘉祐通宝	60%残存	北宋	1056年	篆書	2.4	2.05	0.1	銅銭





第12図 向原西地区 8号溝出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)

9号溝 (第15図)

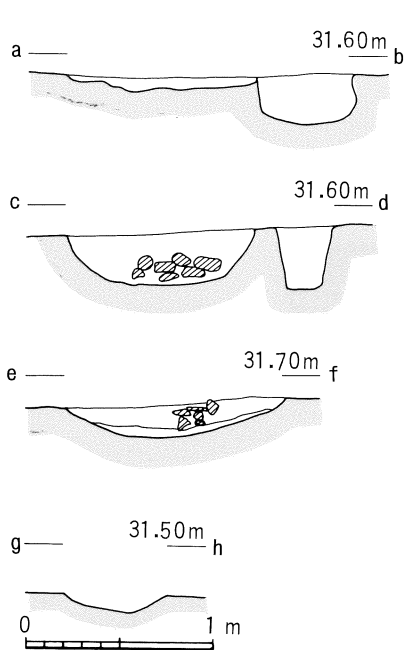
D区南端で検出され、南壁より出て北へ6m、90°東へ折れ、13mのび10号溝に切られる。断面はU字形を呈し、最大幅は60cm、深さは28cmである。何かの区画溝であろうか。時期は不明である。遺物は管状土錘が1点であった。

10号溝 (第15図)

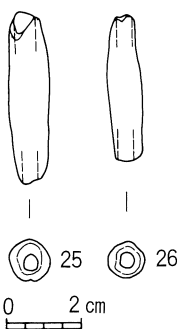
南へ開くコの字状を呈するが、南側は削平されていて不明である。西側溝は人頭大の石を並べている。続く北側溝は握り拳大の礫を敷きつめ、東側溝まで続いている。この溝に囲まれた区画には建物4・5があり、建物4は方位が溝とほぼ等しいことからこの建物の区画溝と考えられる。幅は約1m、深さは約25cmである。遺物は管状土錘が出土しているが他には何もなく時期は特定できない。

11号溝 (第15図)

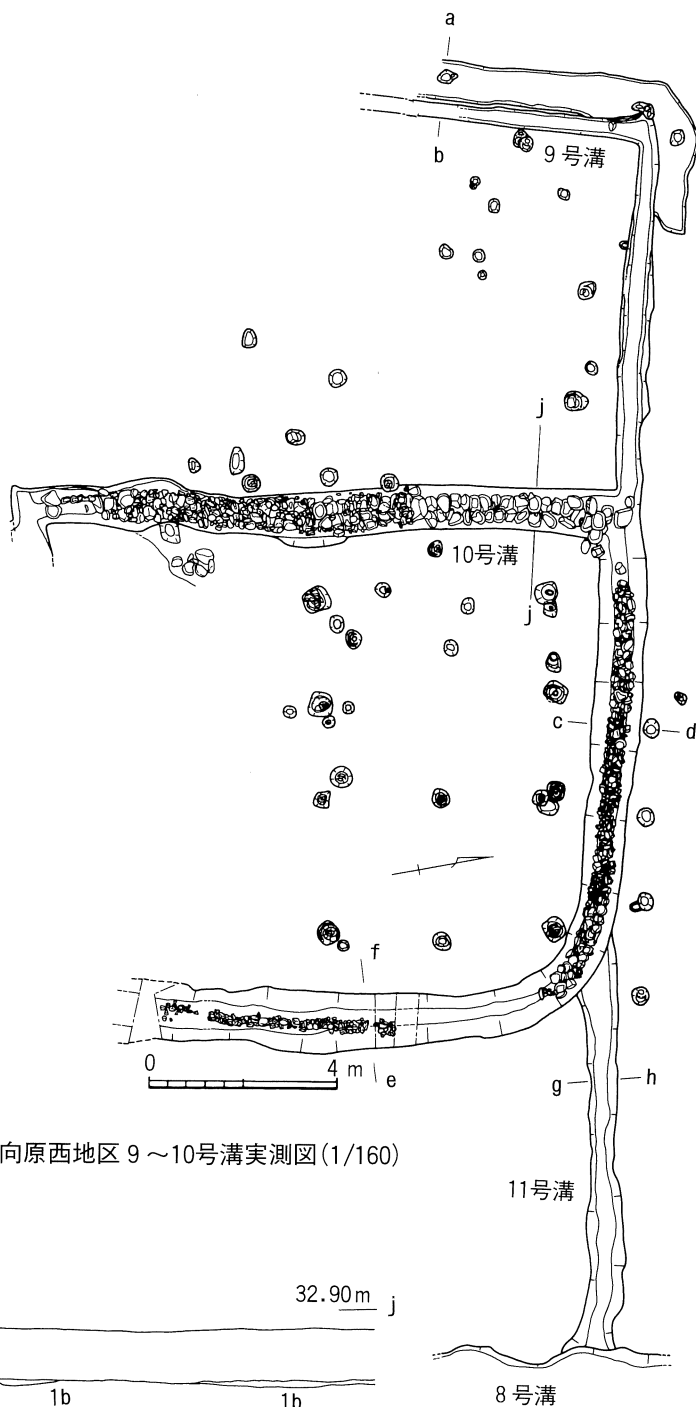
10号溝と8号溝に切られる。N-87°-Wの軸でほぼ東西方向に延びるとみられ、長さ9mを検出した。幅は約80cm深さは13cmと浅い。遺物はないが、中世かそれ以前とみられる。



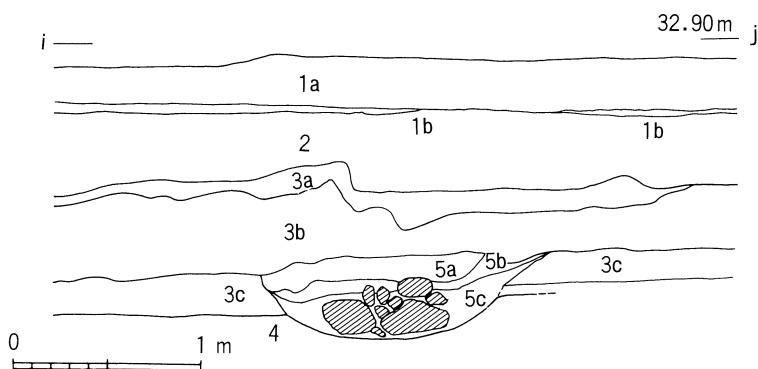
第13図 向原西地区
9～10号溝土層実測図(1/40)



第14図 向原西地区
9・10号溝出土遺物実測図(1/2)

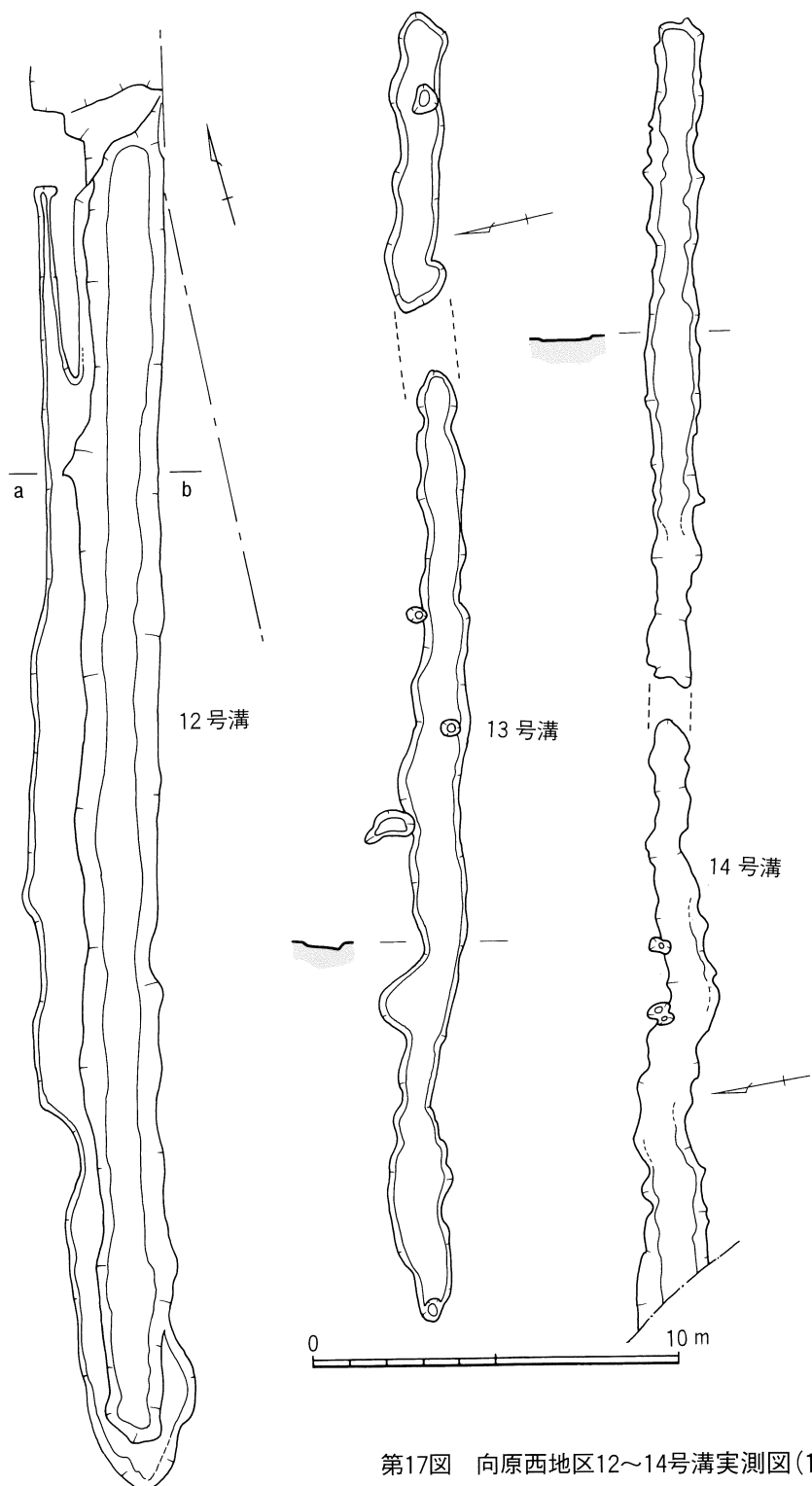


第15図 向原西地区9～10号溝実測図(1/160)



- 1 a 現表土 耕作土 1 b 耕作土 鉄分の沈着多い
- 2 造成土 におい橙色土
- 3 a 暗褐色土(1cm大の小礫をわずかに含む) 旧耕作土
- 3 b 暗褐色土(Ⅲaよりやや締まる) 旧耕作土 3 c 暗褐色土(Ⅲbよりやや粘質) 旧耕作土
- 4 暗褐色土(Ⅲcより粘質) 5 a～c 10号溝の埋土

第16図 向原西地区10号溝土層実測図(1/40)



第17図 向原西地区12~14号溝実測図(1/200)

12号溝 (第17図)

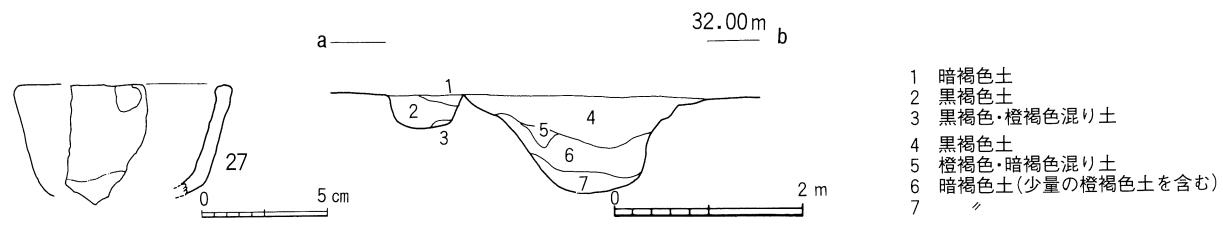
E区の東で検出された。
長さ約18m、最大幅1.8m、深さ52cm軸方位はN-11°-Eである。その北端は4号溝と切り合うと思われるが、新旧関係は攪乱のため不明である。18世紀前半の陶胎染付碗や播り鉢の小片が出土しているため、近世の溝と考えられる。

13号溝 (第17図)

F区内の8号溝の右側をほぼ並行して走る溝で、両端とも削平のためとぎれている。検出した長さは約18m、幅80cmで深さ10cmと浅い。遺物はないので時期の特定はできないが、畑などの区画溝の底部であろうか。

14号溝 (第17図)

G区の北側で検出された溝で、東西に約18mで東端は削平されている。幅約90cmで深さは9cmである。遺物はない。

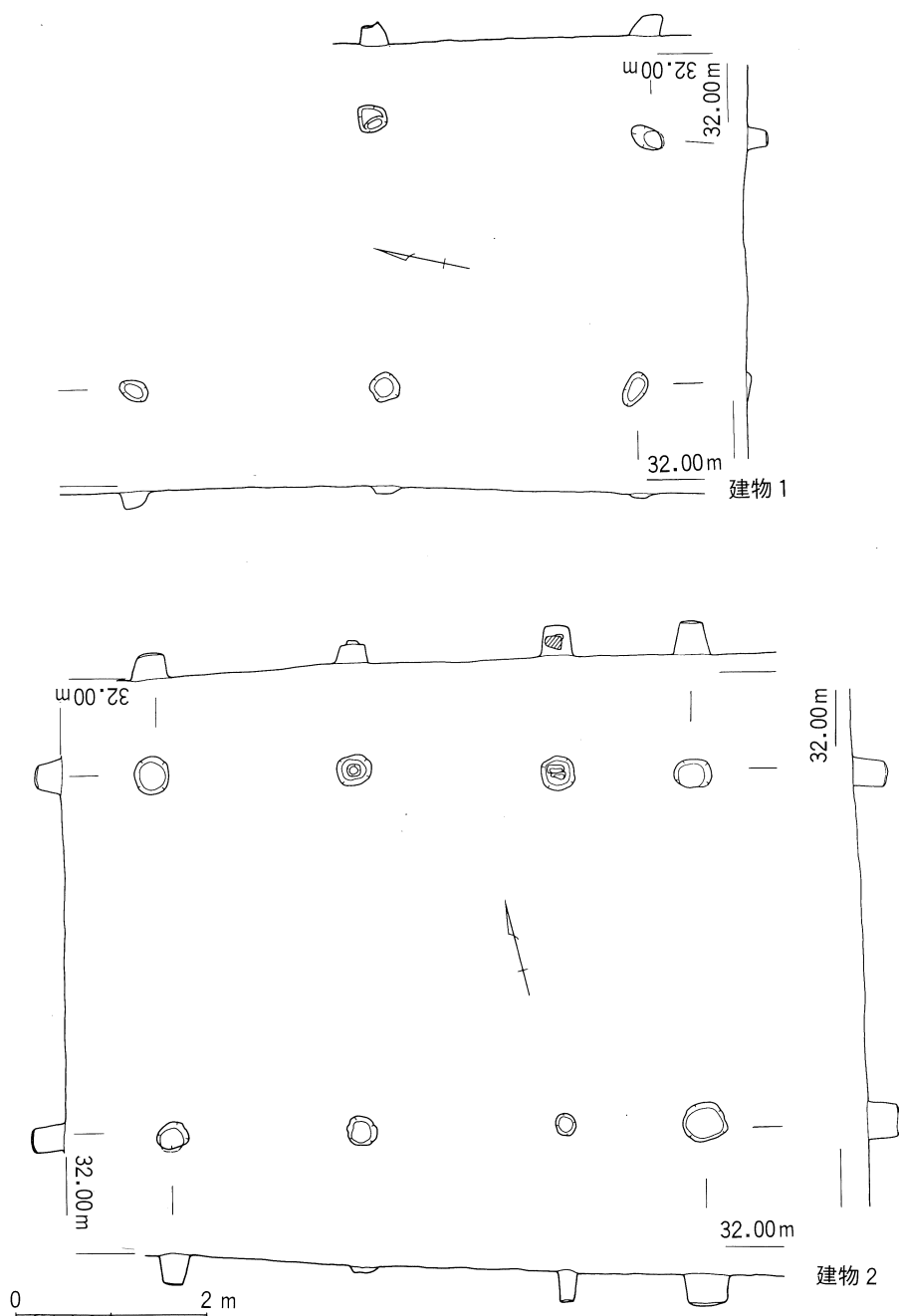


第18図 向原西地区12号溝出土遺物 (1/3) 及び土層実測図 (1/40)

- 1 暗褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 黒褐色・橙褐色混り土
- 4 黒褐色土
- 5 橙褐色・暗褐色混り土
- 6 暗褐色土(少量の橙褐色土を含む)
- 7 //

2. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は本調査区のD・F・Gで計17棟確認された。その分布は大きくD区とF区の東西二つの建物群にわかれている。以下建物の概要を述べる。



第19図 向原西地区 建物1・2実測図(1/80)

建物1 (第19図)

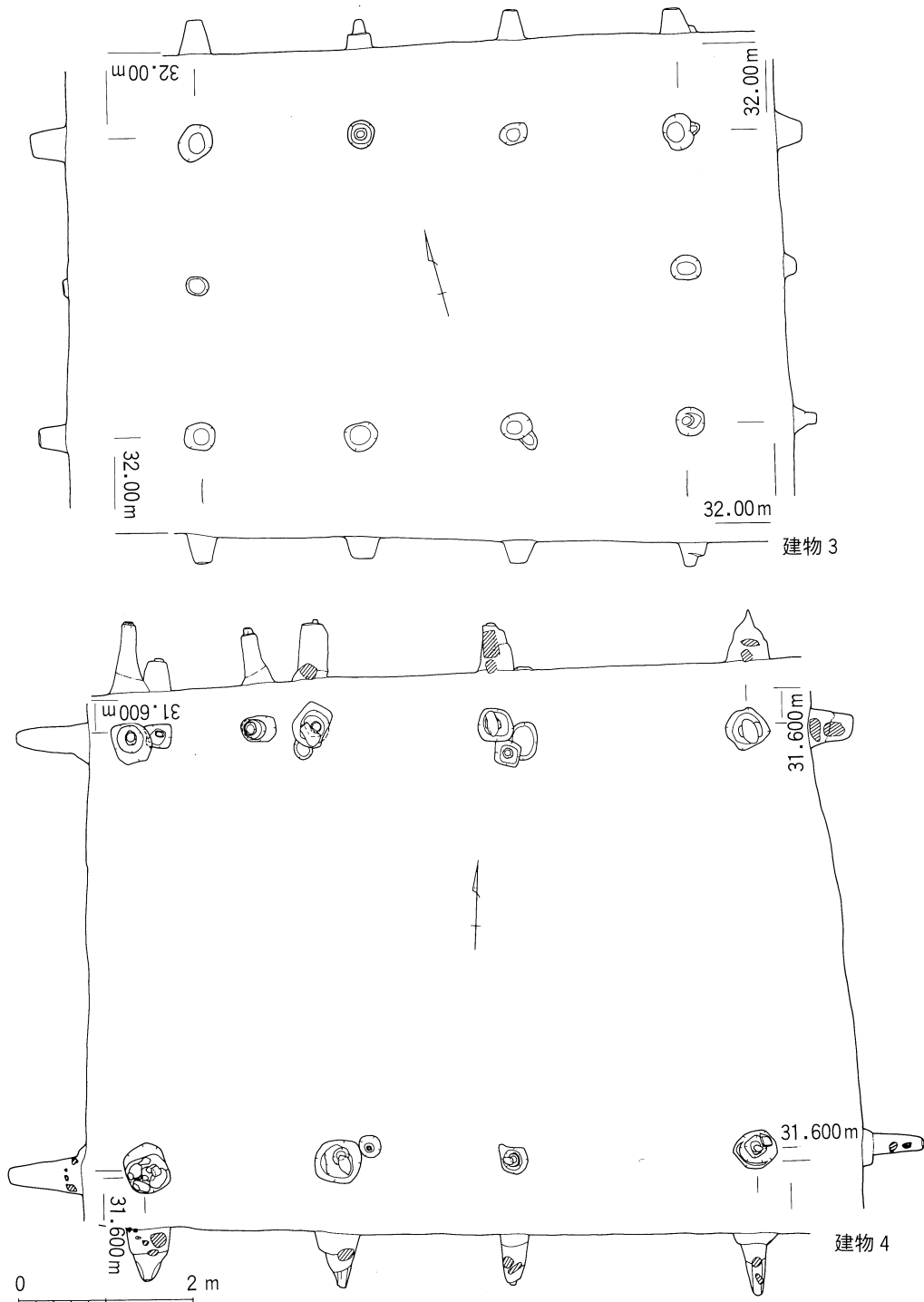
建物はD区北端に位置する。削平により一部柱穴が欠失しているが、梁行き1間、桁行き2間と推測される。主軸はN-11°-Wで、柱穴の掘り方の規模は10cm~30cmである。

建物2 (第19図)

4・5・10号溝に囲まれ、位置関係は、5号溝にはほぼ垂直でありD区中央に位置する。東西に長い1間(約3.6m~3.8m)×3間(約5.6m)である。建物の身舎面積は、20.7m²、主軸はN-79°-Wである。検出面での柱穴掘り方の規模は21~45cm、深さは9~36cmで、出土遺物はなかった。

建物3 (第20図)

建物2の南側で確認され、建物2・4と平行関係にあり、本調査区の建物群の中では建物4とともに2間(約3.3m)×3間(約5.5m)であり、面積は約18m²で大型の部類の建物である。主軸方位はN-78°-Wで、柱穴掘り方は検出面で24cm~45cm、深さ10cm~40cmである。



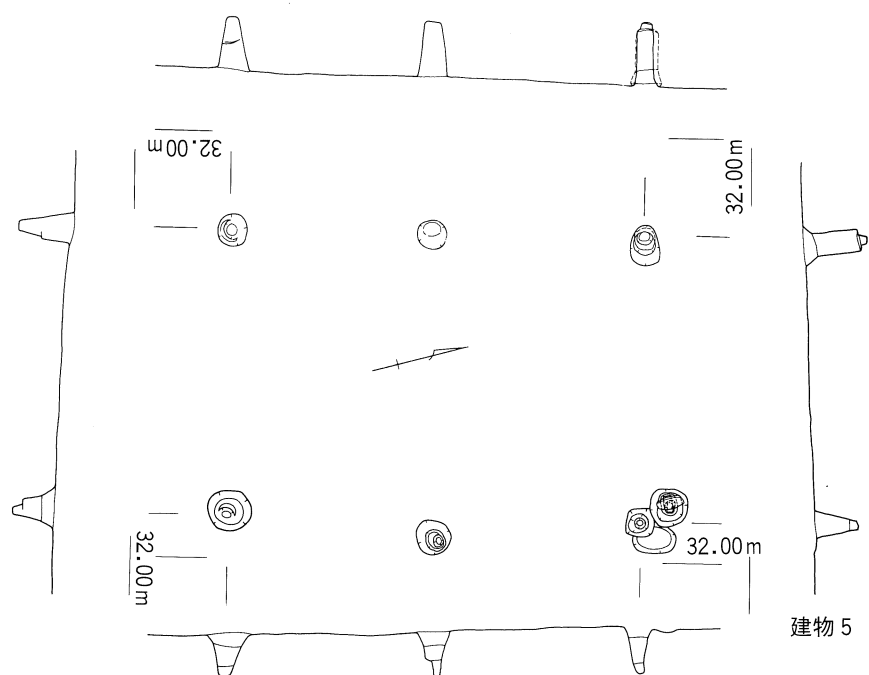
第20図 向原西地区建物 3・4 実測図(1/80)

建物 4 (第20図)

建物 4 はD区の南端にあって周囲を10号溝で囲まれており、この溝に伴うものと考えられる。主軸はD区の建物 2 及び建物 3 に平行で方位はN-88°-Eである。

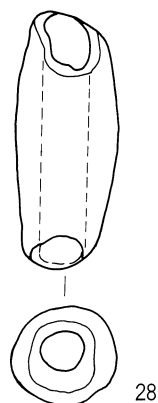
梁行き 1 間、桁行き 3 間、柱間寸法は梁行き東側は 5 m、西側梁行きは 4.8m。桁行き北側は 7.1 m (西より 2.1+2.1+2.9m、) 南側は 7 m (西より 2.2+2+2.8m)、面積は約 34.3²で向原西地区では最大の大きさである。柱穴掘り方の規模は 40cm~50cm、深さ約 70cm ほどで、中に根締め

石を配置しているしっかりとした建物である。柱穴からの出土遺物はなかった。



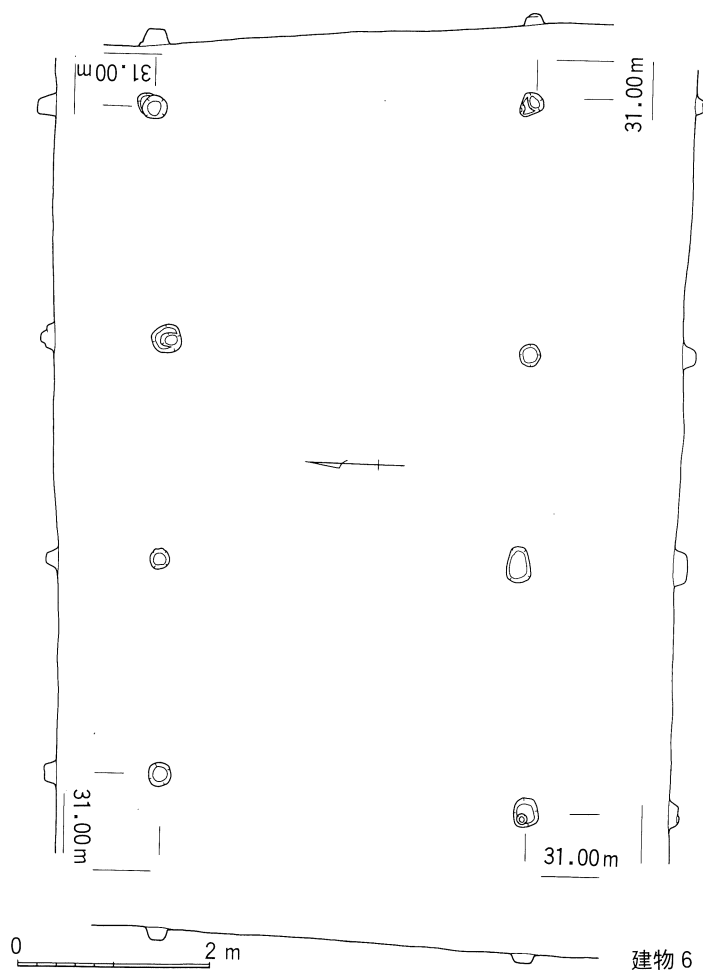
建物 5 (第22図)

建物 5 は建物 4 と同様10号溝に囲まれた中に位置するが、主軸の方位はN-15°-Eであり建物と10号溝との関連は不明である。建物 4 とは切り合い関係にあり、建物 4 を切っている。建物規模は、梁行き1



第21図 向原西地区

建物 6 出土遺物実測図 (1/2)



第22図 向原西地区 建物 5・6 実測図(1/80)

間（約3m）、桁行き3間（約4.3m）、であり。柱穴の掘り方については、35～40cmの径で深さが60cm～70cmと建物の中ではしっかりとしたつくりになっている。出土遺物はなかった。

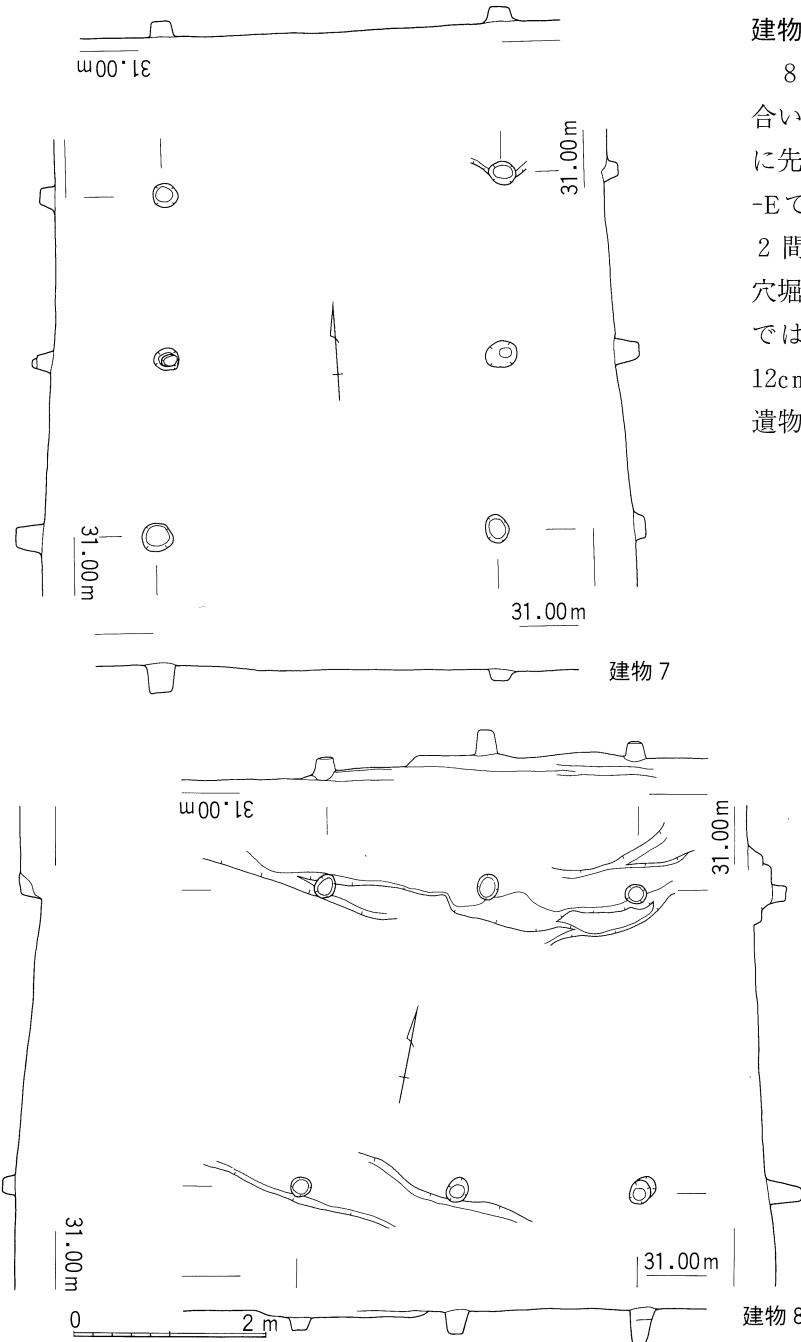
建物6（第22図）

二つの建物群のうちF区内の東側建物群の中にあつて、その中でも西の端に位置する。建物は1間（約3.9m）×3間（約7.2m）、面積は約27.9㎡である。柱穴掘方は検出面では24cm～36cmで、深さは12cm～18cmである。F区を東西に横切る8号溝と13号溝とはほぼ平行である。

28は建物6のピット内上部から出土した土錘である。長さ6.7cm、最大径2.9cm、重さ41.1gの管状土錘A I型である。土錘は1・8・9・10号溝から出土しているが、いずれも管状土錘A II型であり、28は形、大きさともそれらとは異なる点に注目される。

建物7（第23図）

8号-b溝と13号溝に切合い関係があり、建物が溝に先行する。軸方位はN-2°-Eで、1間（約3.5m）×2間（3.7m）を測る。柱穴掘り方の規模は、検出面では24cm～30cm、深さは12cm～30cmである。出土遺物はなかった。



第23図 向原西地区 建物7・8実測図(1/80)

建物 8 (第23図)

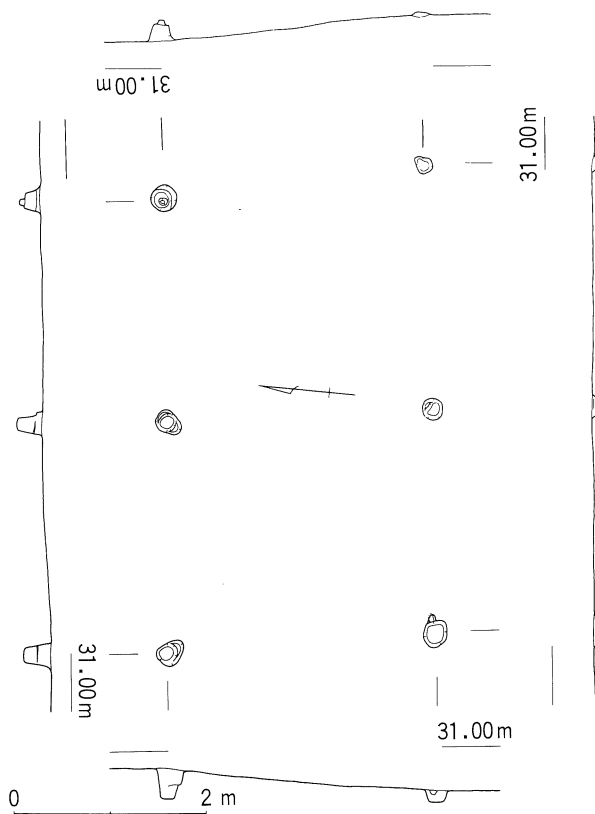
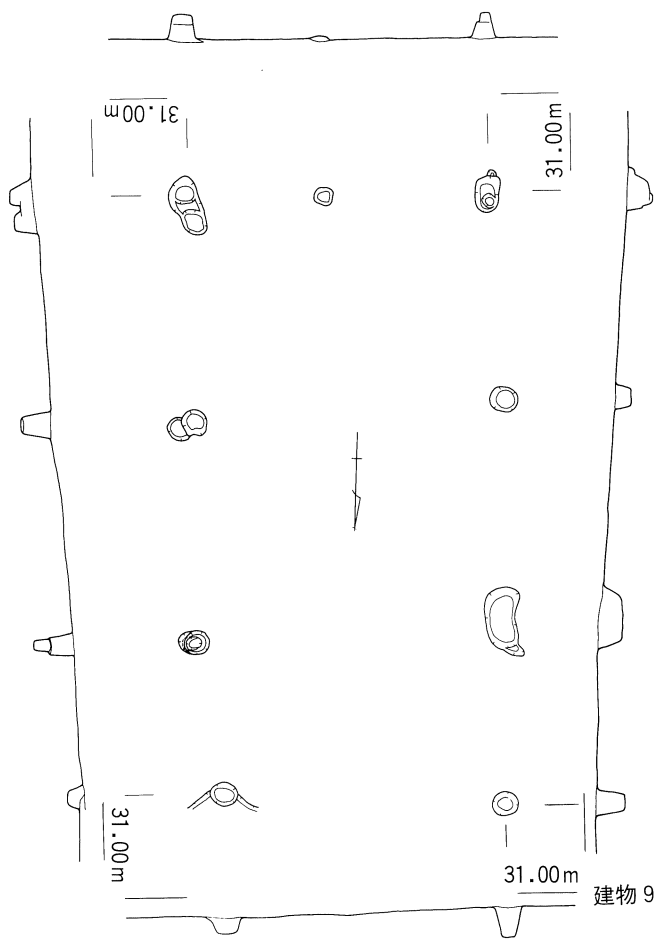
建物 7・9・10と切り合い関係にあるが、新旧は不明である。1間 (3.2m) × 2間 (3.3~3.5m) の規模で、軸方位はN-79°-Eにある。柱穴掘り方は遺構検出面で21~30cm、深さは15~39cmである。出土遺物はなかった。

建物 9 (第24図)

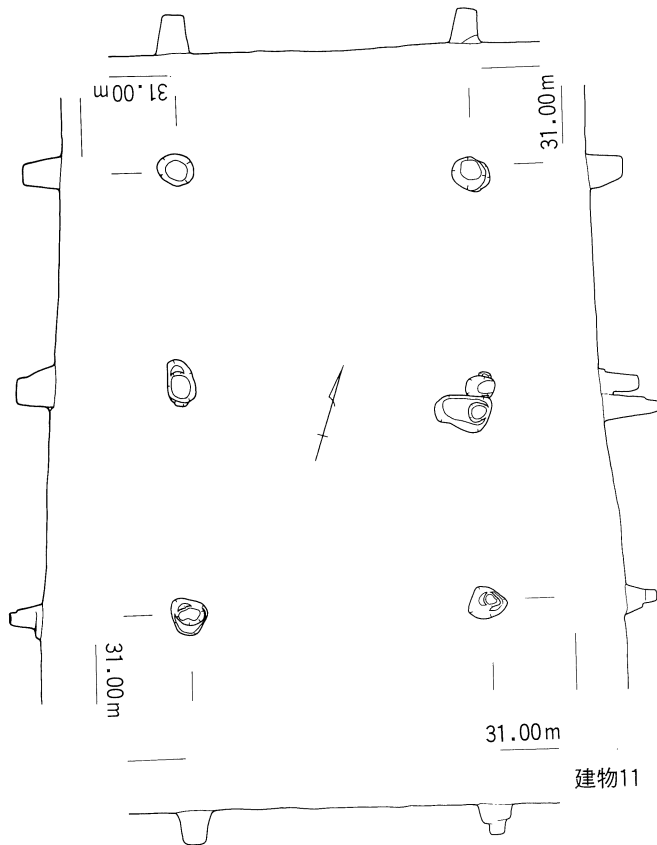
8号溝の南側で検出され、南北方向に長い2間 (3.2m) × 2間 (6.2m) の建物である。軸はN-8°-Eで、柱穴掘り方21cm~60cm、深さ6cm~42cmである。出土遺物はなかった。

建物10 (第24図)

東西方向にN-86°-Eの軸をもつ、1間 (約2.8m) × 2間 (約4.8m) のやや細長い建物である。身舎面積は13.4㎡で、柱穴掘り方規模は15cm~27cmで、深さは6cm~33cmである。建物7・8が溝に先行しつくられたと考えられるのに対し、建物7・8と切合い関係にあり溝に平行な建物10は、溝よりも後につくられたものとみられる。



第24図 向原西地区 建物 9・10実測図 (1/80)

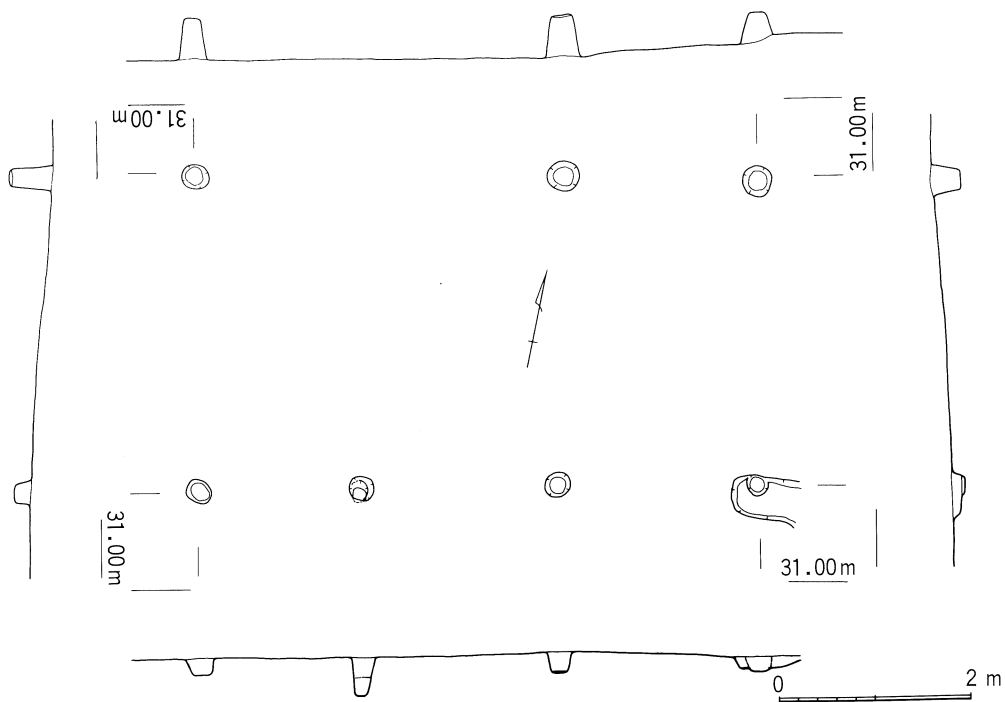


建物11 (第25図)

建物 8 の東側に平行するかたちで
 検出され、13号溝に切られている。
 建物規模は 1 間 (約 3.1m) × 2 間
 (4.6m) で、柱穴掘り方は 36cm~60cm、
 深さは 36cm~66cm である。
 主軸の方位は N-18°-E となってお
 り、建物 8 と同時期のものと考えら
 れる。

建物12 (第25図)

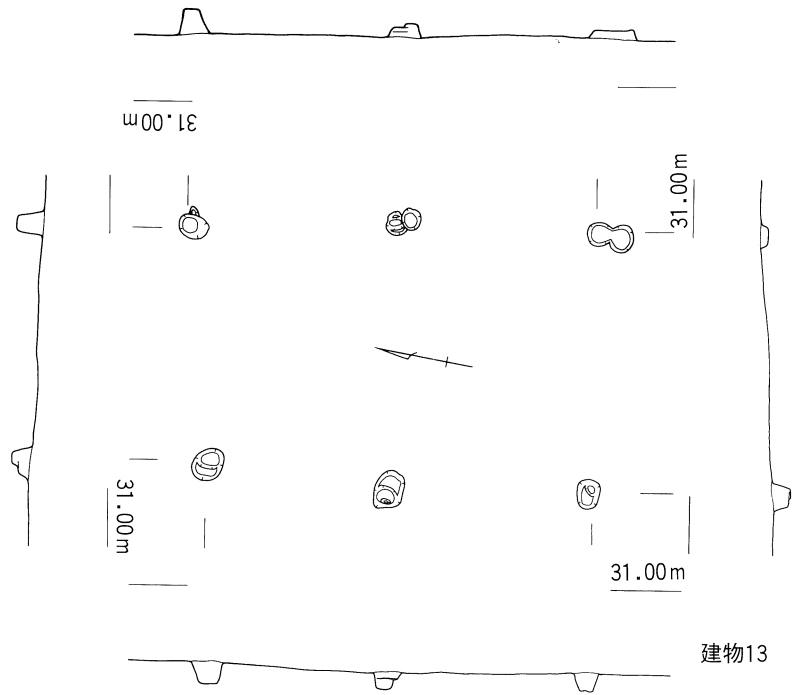
F 区の北東端の、8 号溝の南側に
 位置する建物である。東西方向に N
 -79°-E の主軸をもつ。1 間 (約 3.2m)
 × 3 間 (5.9m)、身舎面積 18.9m²
 の規模である。柱穴の掘り方は、約
 27cm~33cm、深さは 16cm~48cm を
 測る。



第25図 向原西地区11・12建物実測図 (1/80)

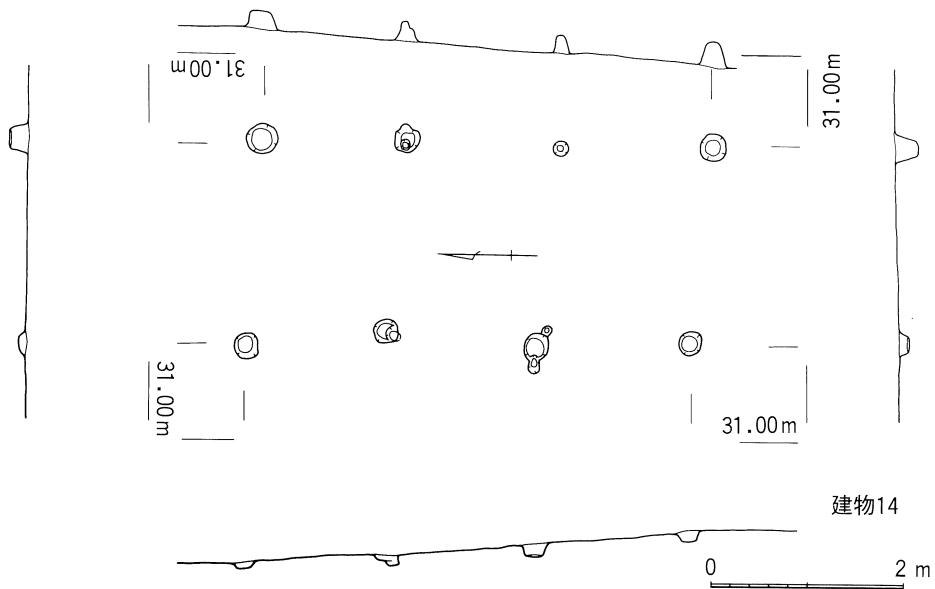
建物13 (第26図)

この建物はF区のほぼ中央、建物6の東側で検出された。東西方向にN-85°-Eの軸をもつ。規模は1間(約2.5m)×2間(約4.3m)で身舎面積は10.8㎡である。柱穴掘り方の規模は30cm~40cm、深さは12cm~30cmである。建物12と同時期に存在した可能性がある。



建物14 (第26図)

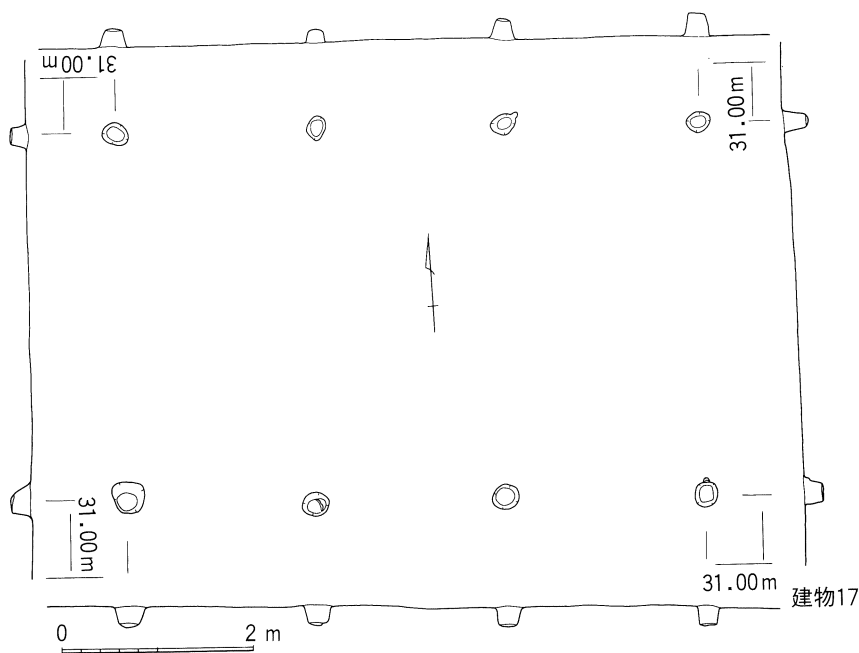
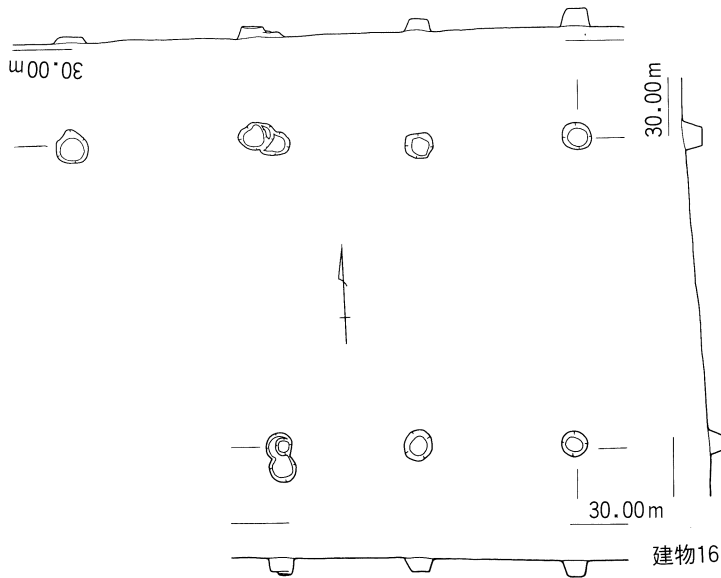
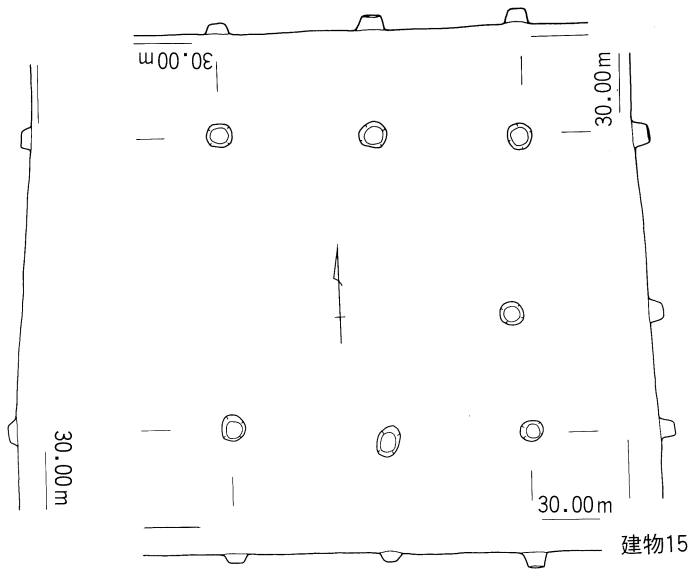
南北に長い2間(2.1m)×3間(4.7m)の建物で、身舎面積は9.9㎡である。建物16と切り合い、軸方位は、N-1°-E。柱穴規模は掘方18cm~36cm、深さ9cm~30cmである。建物15と同時期か、建物16の後にたてられたと考えられる。



第26図 向原西地区 建物13・14 実測図(1/80)

建物15 (第27図)

建物14の東側で検出された1間×2間、軸方位N-89°-Eの建物である。ほぼ正方形をしており、建物16の前に位置していた。柱穴掘り方は27cm~36cmで深さは12cm~18cmである。身舎面積は9.9㎡と小型である。



建物16 (第27図)

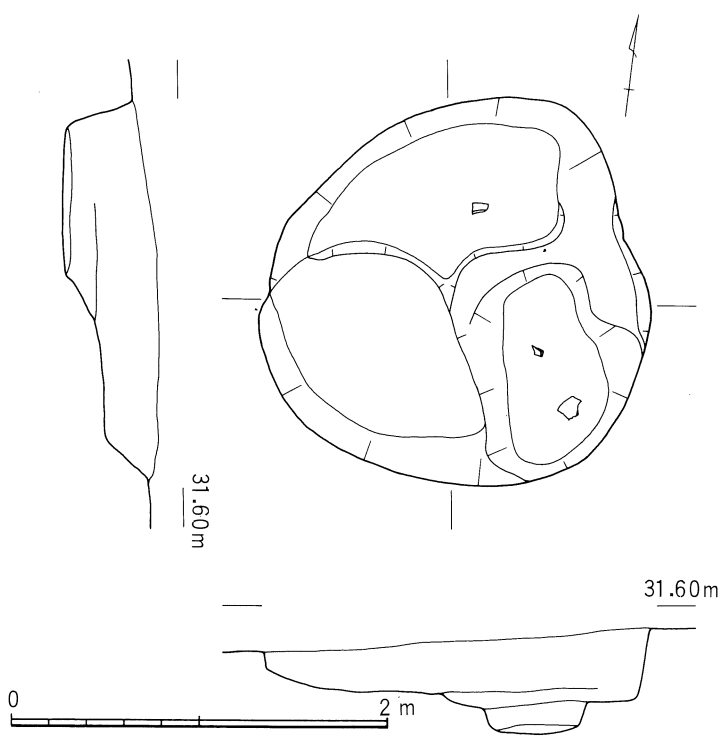
東西に長軸をもつ1間(約3.3m)×2間(約5.3m)の建物である。建物14と切り合う関係で建つが、前後関係は不明。建物15の後ほぼ同位置に建てかえられたと考えられる。F区内の8号溝には少し距離はあるが平行で、同時期のものと考えてもよい。身舎面積は約17㎡である。柱穴1基欠失する。

建物17 (第27図)

D区、F区の2つの建物群とは離れたやや南側のG区に建つ、東西方向に長い1間(3.8m~3.9m)×2間(6m~6.1m)の建物である。身舎面積は約23.2㎡で、比較的大きな建物であり、軸方位はN-84°-Wである。検出面の柱穴の掘り方の規模は21cm~33cmで、深さは15cm~27cmである。

第27図

向原西地区建物15
~17実測図(1/80)

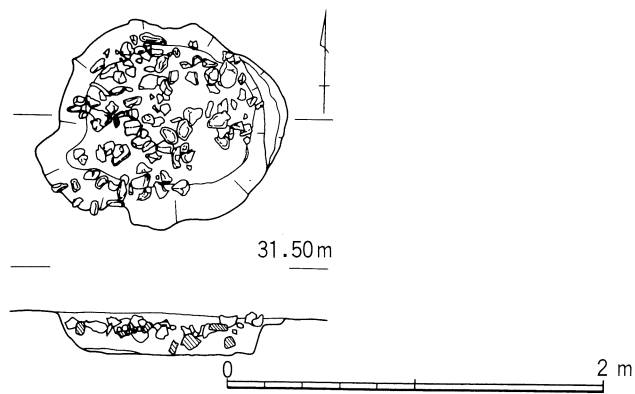


第28図 向原西地区 1号土坑実測図(1/80)

3. 土坑

1号土坑 (第28図)

F区の中央にあり、ほぼ円形を呈する土坑である。3段に掘られており、検出面から床面までは0.25~0.58mを測る。内部からは、15cm大の礫と若干の土器片が検出されたが、出土状態に変化は観察されなかった。第31図29は弥生前期の壺の頸部~胴部である。5条の沈線がめぐらされている。他にも胴部、底部などの小片も検出された。いずれも同時期とみられる。



第29図 向原西地区 2号土坑実測図 (1/40)



第30図 向原西地区 3号土坑実測図 (1/40)

2号土坑 (第29図)

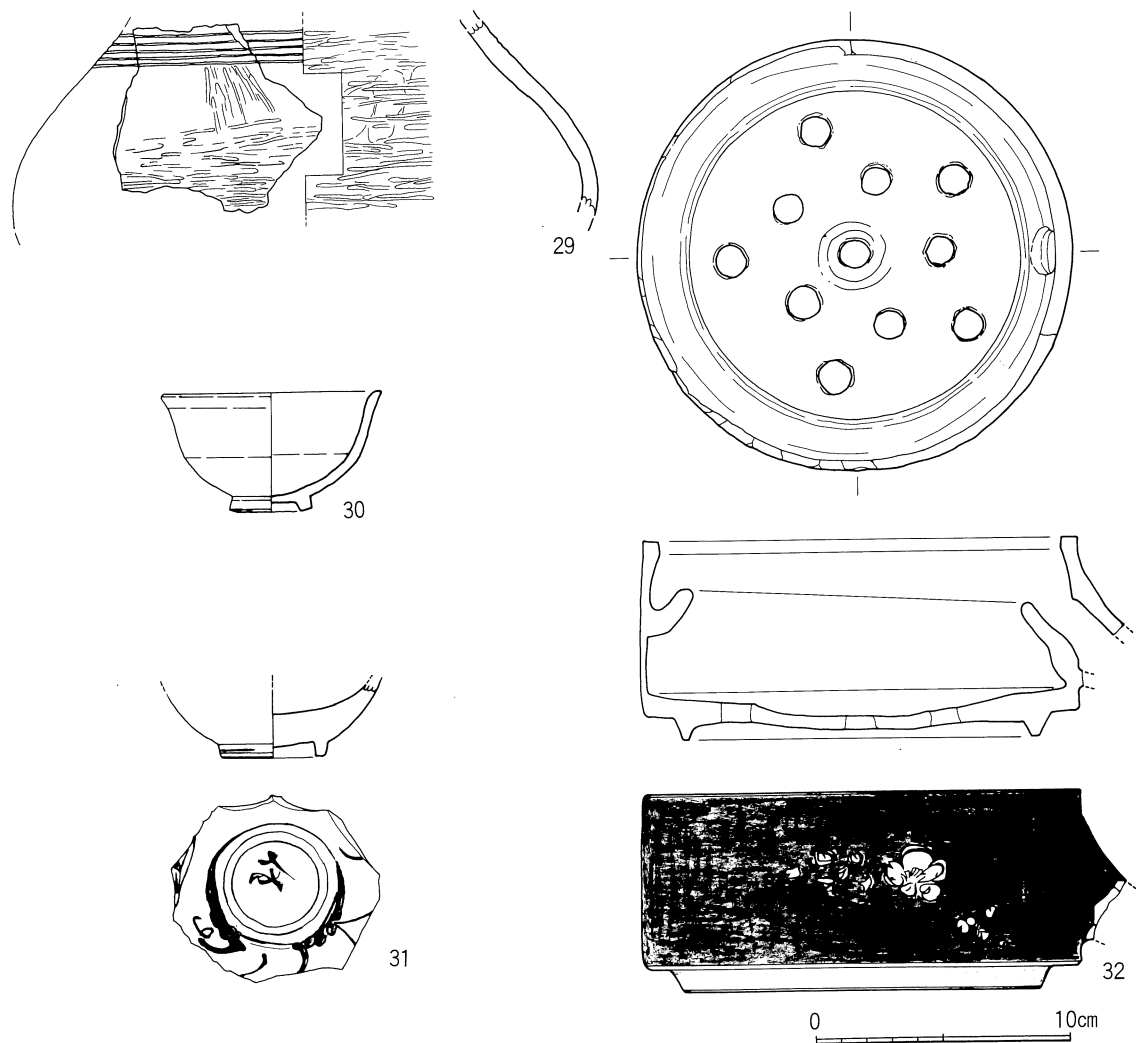
F区の北西隅で検出されたやや楕円形のプランを呈した土坑である。長軸が1.4m、短軸が1.1mで検出面から床面までは0.2mと平坦である。内

部は拳大までの礫が入れられている。礫は焼成を受けた痕跡はなく遺物も検出されなかった。

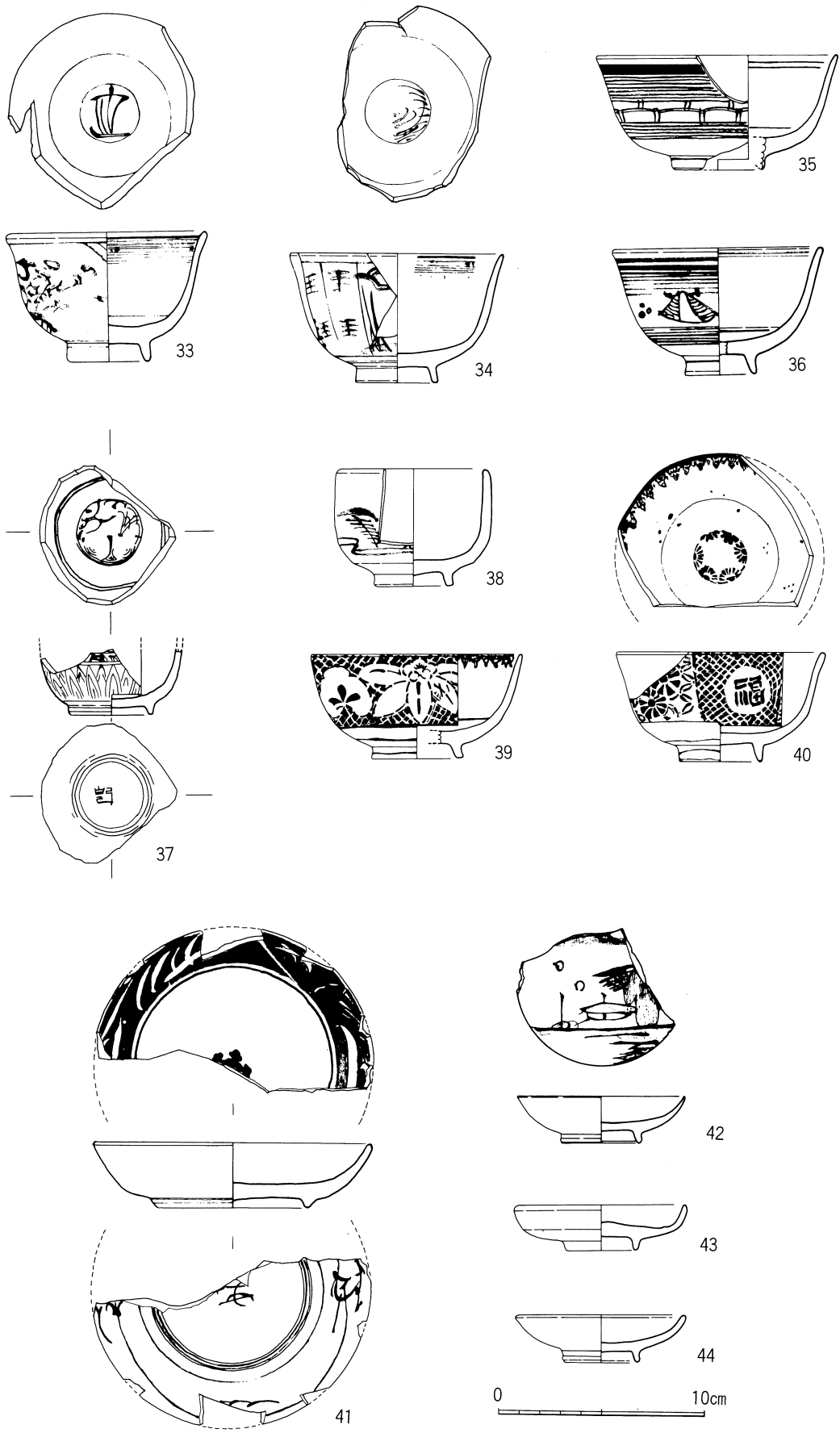
3号土坑（第30図）

斜面状のC区の中央を東西に縦断する形で検出された溝状の土坑である。東端は削平を受けているが、検出規模は長軸約12m、幅2m～2.5mと大型である。深さは最深部で1mを測る。古い民家の敷地内であり、内部からは近世～現代に至る遺物を一括して検出した。

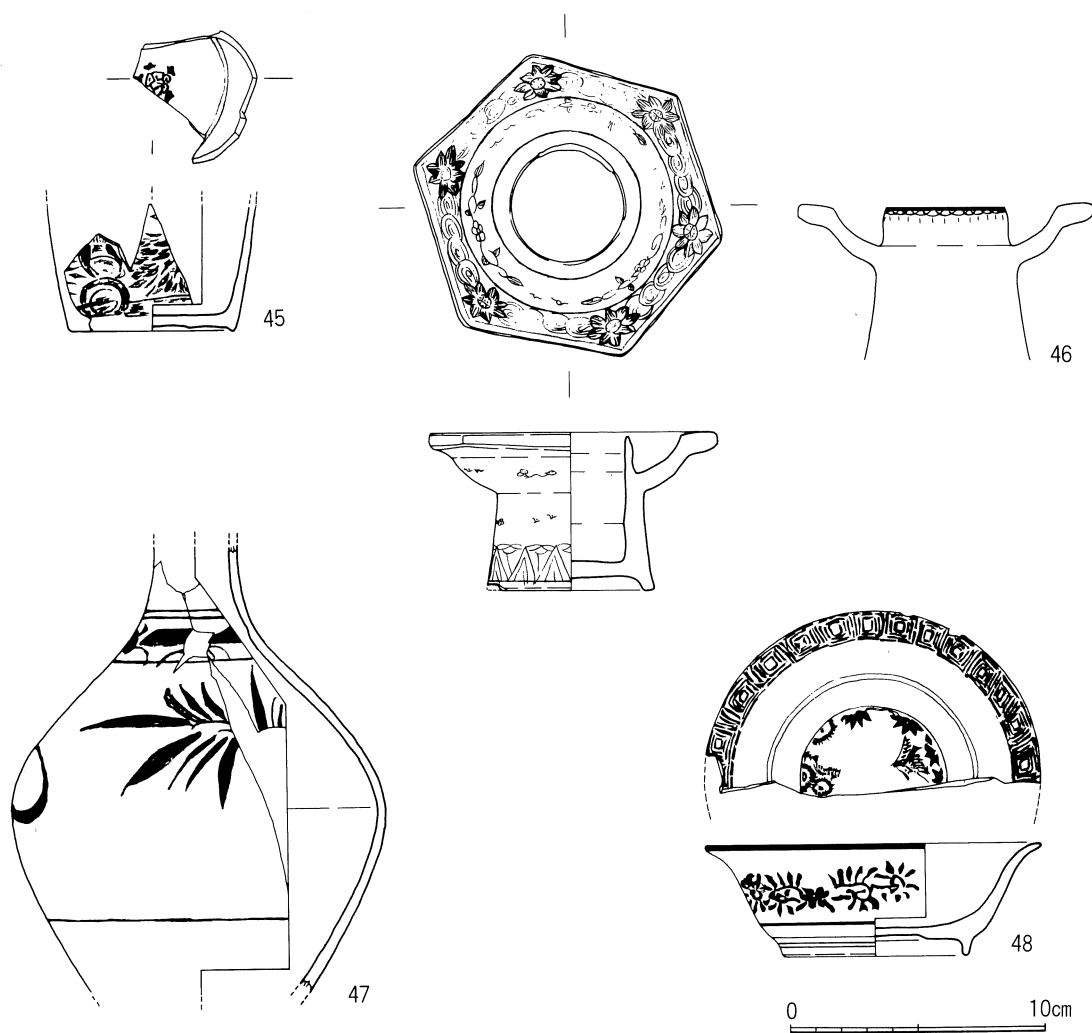
第31図30は信楽系の湯呑碗（陶質）で、高台部付近は露胎となる。製作年代は18世紀後半以降の製品である。31は肥前系染付け磁器碗の高台部で文様は「草花雪輪」。内底部には大明年製崩れ銘を有する、18世紀後半の製品である。32は蘭引きの中段の渡り部である。本来三段からなるが上・下段は欠失している。梅花文を施す京焼きで、19世紀のものである。33～36は18世紀終わりから19世紀中頃に生産された端反碗である。37は内面見込みに松竹梅円形文、内底部に「乾」の字を描く碗、38は湯呑碗でともに肥前系である。39・40はいずれも明治初めの型紙刷りの技法で色づけされた磁器碗である。41～44は磁器皿である。41は18世紀後半、炭はじきの技法を用いた染付け磁器皿である。42～44は19世紀のものである。45は18世紀後半から19世紀前半頃に生産された肥前系の猪口である。見込みには手書きによるコンニャク印判五弁花を施し、底部は凹型高台を有する。46は盃台で19世紀前半のものと思われる。47は肥前染付瓶類で製作年代は18世紀後半に比定される。48は明治年代の鉢である。



第31図 向原西地区1号・3号土坑出土遺物実測図(1/3)

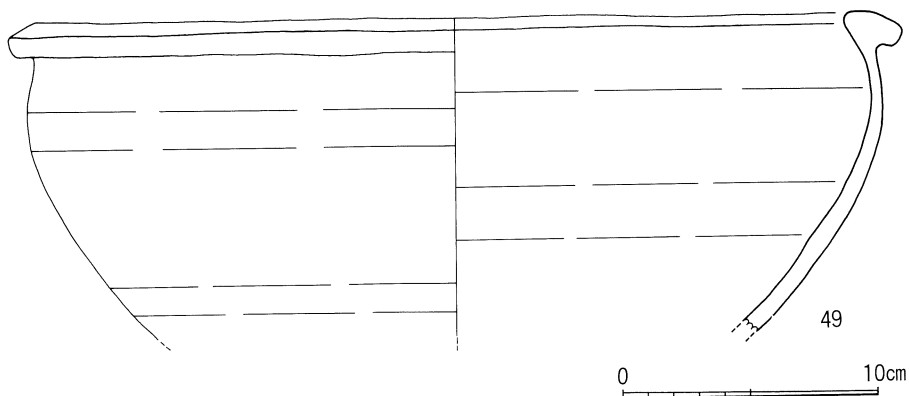


第32图 向原西地区3号土坑出土遗物实测图1 (1/3)

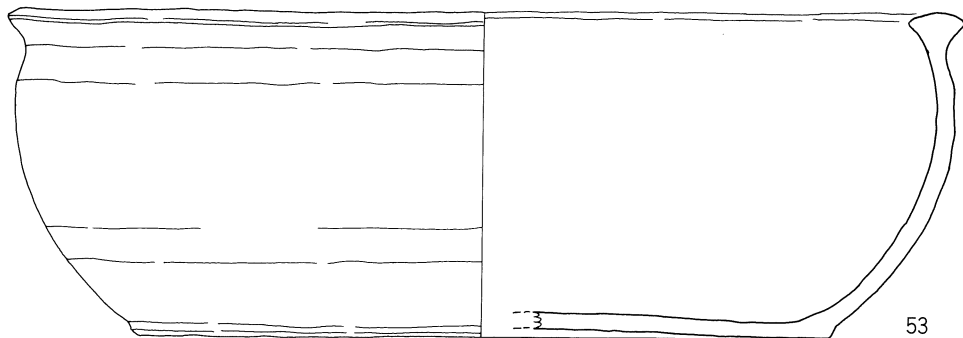
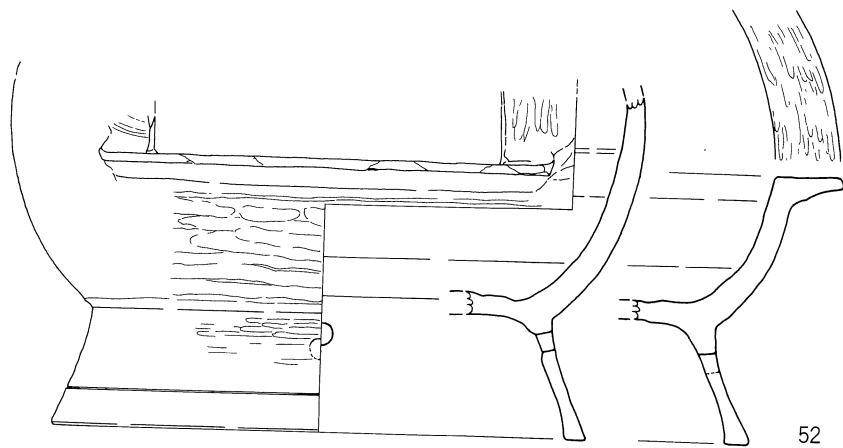
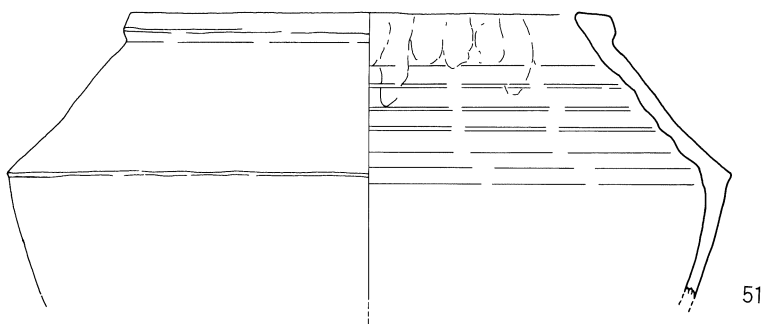
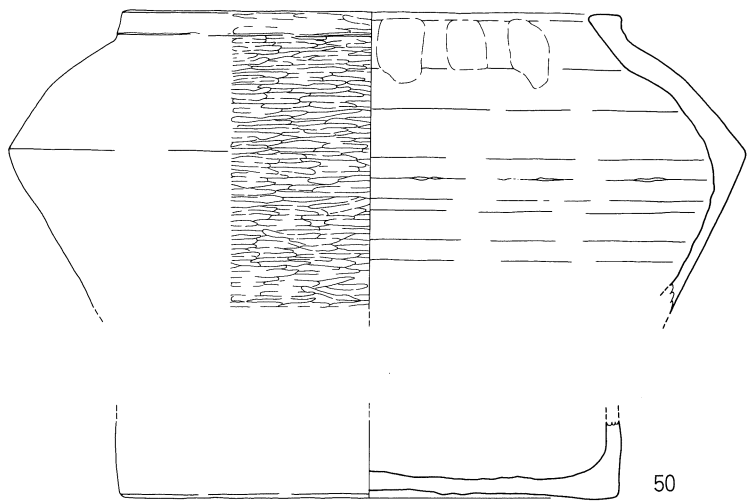


第33図 向原西地区3号土坑出土遺物実測図2 (1/3)

49・50は火鉢である49は陶質で全面に施釉で灰浅黄色を呈する。50は豊後海岸部産の瓦質火鉢である。51・52は火消壺、53は焜炉である。高台部に貫通孔を有する。いずれも瓦質土器で19世紀のものである。54・55はともに肥前系の播り鉢で、18世紀後半以降と思われる。56は寛永通宝の銅銭である。

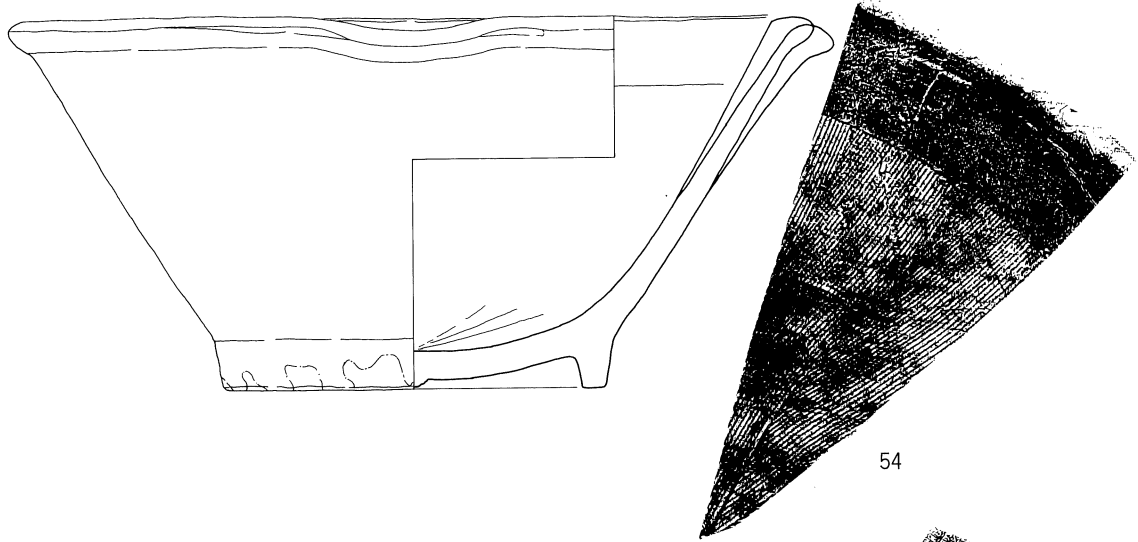


第34図 向原西地区3号土坑出土遺物実測図3 (1/3)

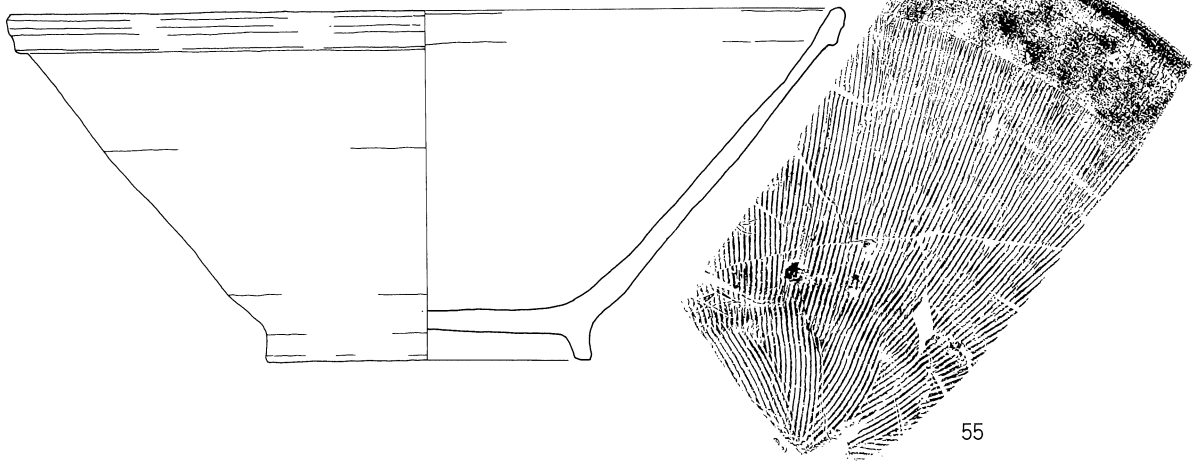


0 10cm

第35図 向原西地区3号土坑出土遺物実測図4 (1/3)

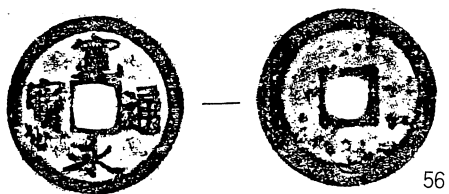


54



55

0 10cm



56

0 5 cm

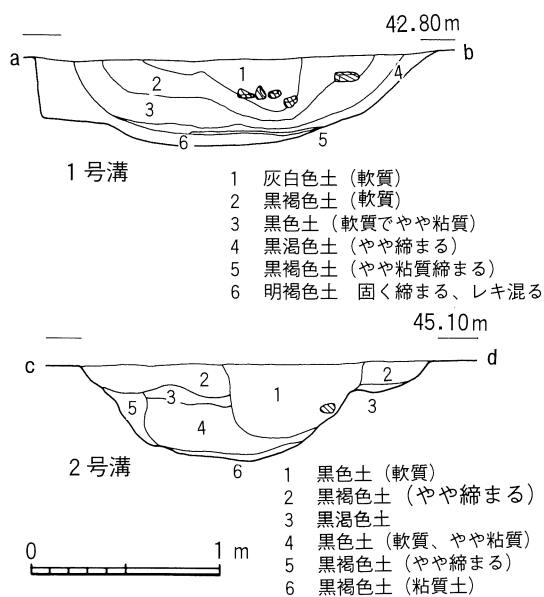
第36图 向原西地区3号土坑出土遺物実測图5 (1/3)

カヨウ地区



第37図 カヨウ地区遺構配置図 (1/200)

真萱遺跡カヨウ地区は、向原西地区の西、標高38mに位置する。大野川に向かって階段状に削平された平坦面が緩やかに傾斜した地形となっている。遺構は、掘立柱建物1棟、溝状遺構2条などが検出された。



第38図 カヨウ地区1・2号溝土層実測図 (1/40)

1 溝状遺構

1号溝 (第37図)

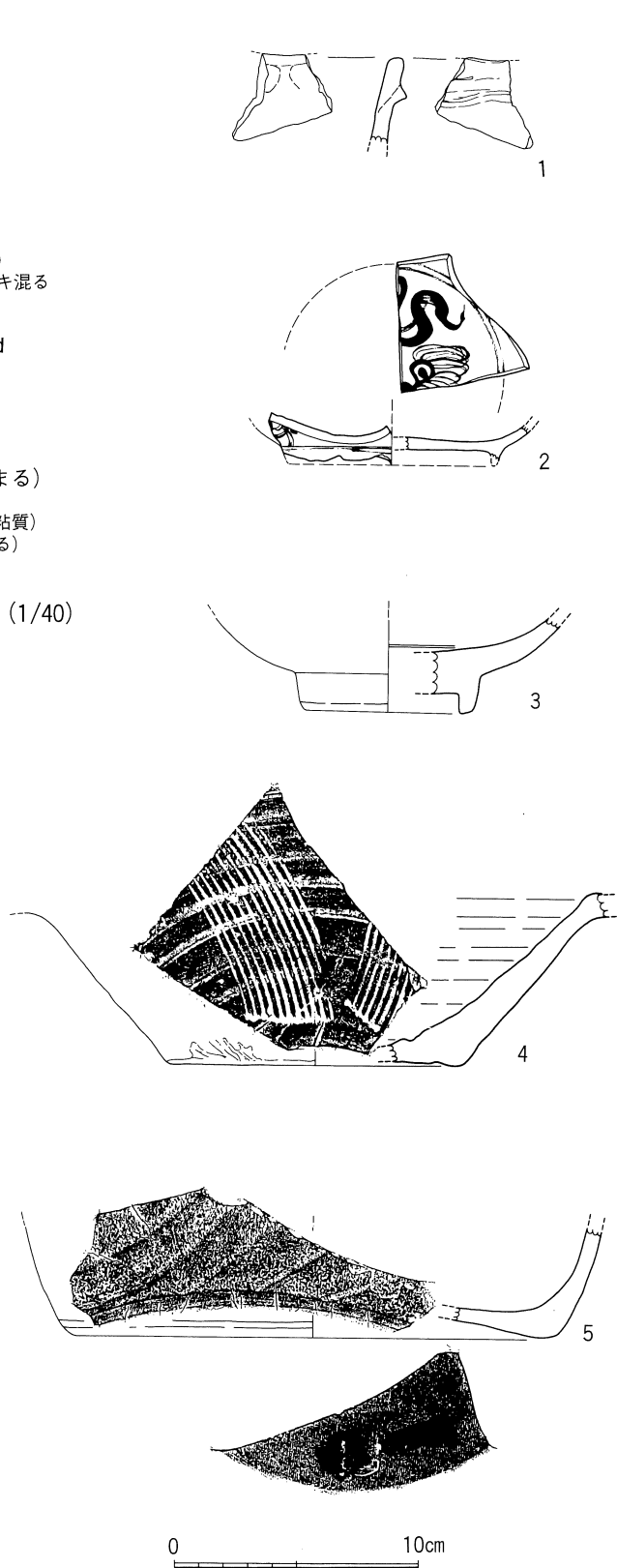
調査区中央南寄りで確認された溝で、調査区を東西にのびる。溝の東側は地形が後世の掘削で落ち込み、溝は消失してしまっている。溝の残存長約22m、検出面での幅約1.6mを測り、深さ約40cmでU字状を呈している。溝の中からは青磁や播り鉢片が出土している。

2号溝 (第37図)

調査区南西角から出て東へL字状に曲がる溝である。溝の残存長は西側6.6m、北側は14mで溝の断面はU字状を呈し、深さは約55cmである。遺物は底部に線刻印を施した鉢 (明治以降) など少量である。

調査区内出土遺物

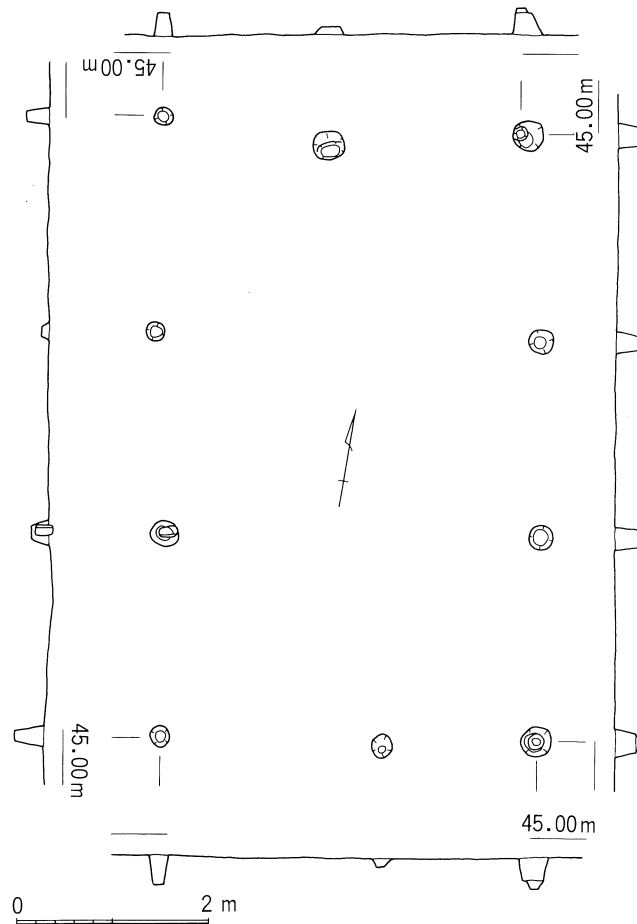
1, 2は西側張り出し部分からの出土で、1は縄文晩期の鉢の口縁部で、2は中国景德鎮系の染付磁器皿であり、16世紀のものと思われる。いずれも、遺構にともなうものでは



第39図 カヨウ地区 調査区内出土遺物実測図 (1/3)

ない。2、3は1号溝内出土である。2は中国製青磁碗の高台部である。色調は灰オリーブ色を呈している。4は備前焼の播り鉢の底部である。1号溝の3層内から出土している。

2 掘立柱建物跡

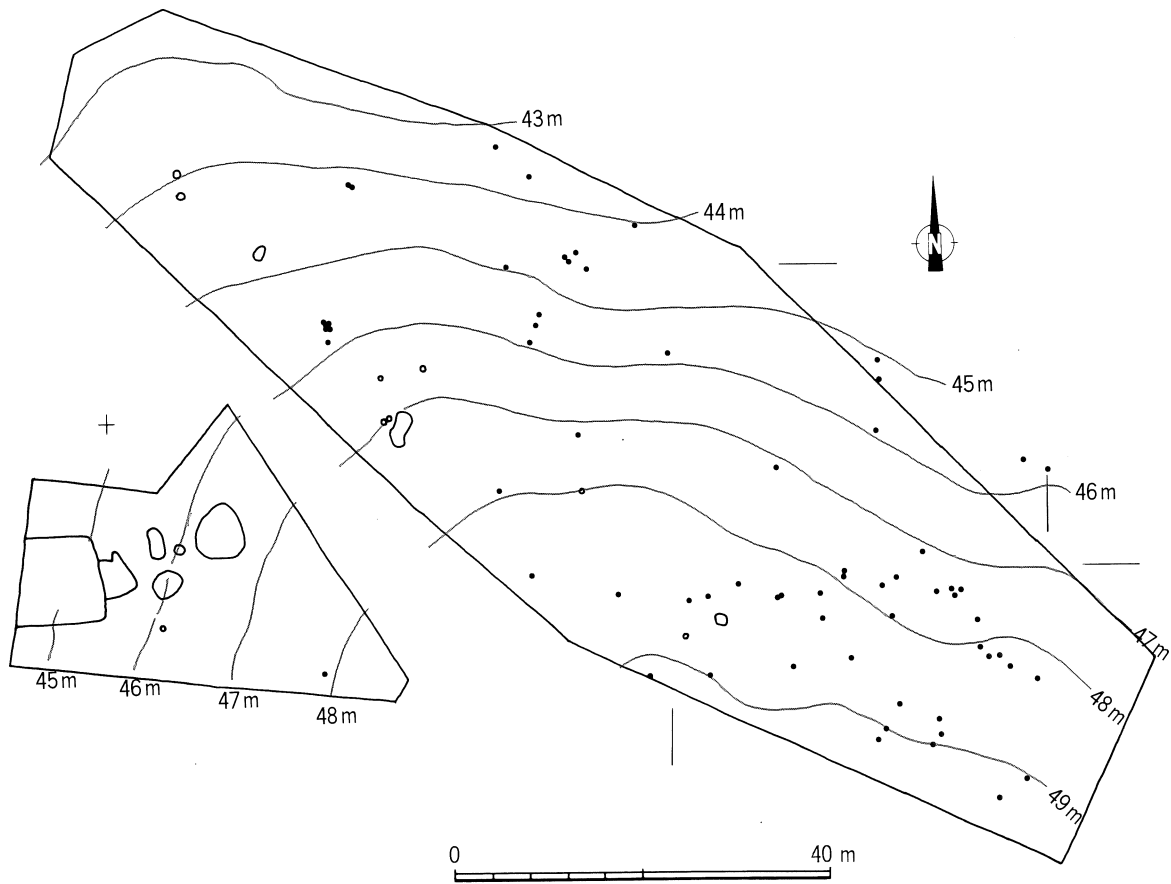


第40図 カヨウ地区建物1 実測図 (1/80)

建物1 (第40図)

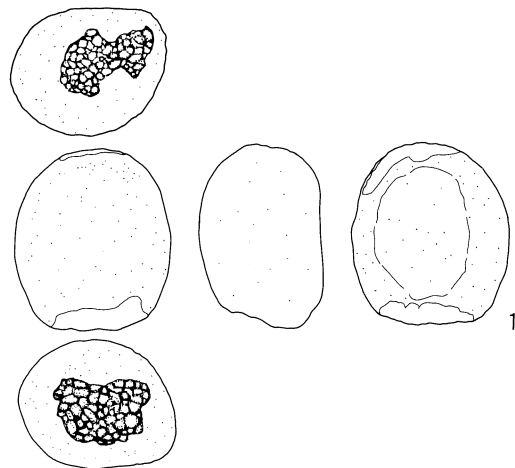
本調査区で確認された掘立柱建物は1棟のみで、調査区中央西側で確認された南北方向に長い1間(3.7m~4m)×3間(約6.3m)の建物である。身舎面積は約23m²で建物の軸方位はN-5°で、柱穴の掘り方の規模は検出面で18cm~32cmである。柱穴の深さは5cm~31cmである。遺構に伴う遺物の出土遺物はなかった。

真萱の上地区

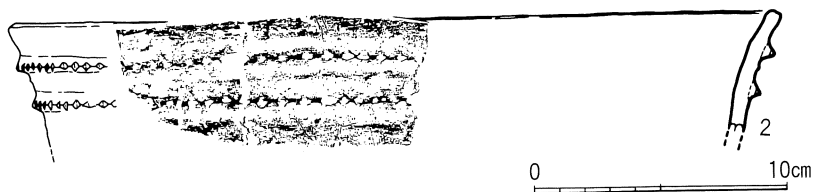


第41図 真萱の上地区遺構配置及び遺物（礫も含む）分布状況（1/400）

真萱の上地区は真萱遺跡群の中では最も標高の高い（約46m）場所に位置する。主だった遺構としては焼土坑（2m×1m）のみで、その中からは遺物の出土もなく時期も不明である。その他には、段丘面の2次堆積中から旧石器時代のものと思われる流紋岩製石核と剥片少量、たたき石（1）を検出した。また、外傾する口縁部に2条の同時に刻目を加えた刻目突帯文をめぐる甕型土器（2）も検出された。



第42図 真萱の上地区出土遺物
実測図（1/3）



第Ⅳ章 まとめ

向原西地区は溝状遺構13条、掘立柱建物跡17棟、土坑3基を検出した。溝状遺構を分類すると①8号溝のように中世の遺物を多く含み、近世以降の遺物は全く出土しないもの。②土錘が出土した遺構(1・8・9・10号溝)。③近世遺物のみ出土する遺構(3・4号溝)。④遺物をまったく検出しない遺構(2・5・6・7・13・14号溝)に分けられる。8号溝で出土した土錘と1・9・10号溝の土錘は形状等が共通し、同一時期のものとして仮定すれば、1・9・10号溝を中世の溝に位置付けることができる。8号溝の場合台地の中でも尾根状に高くなった部分を貫いていることから水路としての性格も考えられるが、コの字状を呈する何らかの区画溝と考えることもできる。また、10号溝も建物4に伴うものである。一方、3・4号溝のように近世陶磁器を検出した遺構は明らかに流水の跡があり、近世には水路として利用されていたことがわかる。大野川の沖積地より比高差約20mの地に洪水を避けて田畑による耕作を営むため、溜め池をつくり、あるいは湧水を利用した灌漑のための水路をつくるなど、昭和井路が通じるまで土地を可能な限り有効に利用し生産向上に努めてきた松岡の土地開発の歴史の一端がうかがえる遺跡である。掘立柱建物跡については8号溝との関係が注目されるものが数棟ある。しかしながら碗や皿などの遺物はほとんど出土はなく、生活に関連するような痕跡は遺物からはわずかしかがうかがうことができない。

近世から現代に至る遺物を検出した3号土坑はC区にあり、かつてこの地域を南北に走る主要道路が通る脇にあり沿線に生活する人たちの住居にともなうものと考えられる。出土遺物の多くはこの土坑からであり、中でも「蘭引き」は珍しい資料である。蘭引きはalambiqueというポルトガル語に由来し通常3段重ねの陶器製の深い鍋のことをいうが、水や酒類を蒸留することを「蘭引きする」ともいう。使用法は下段の過熱部に入れた水や酒類を熱し、上段の冷却部に冷却用の水や氷を入れて蓋とし、過熱部より出た水蒸気が冷却部の蓋の底で冷やされて露となり流れ出る仕組みの蒸留器である。3号土坑出土の蘭引きは中段の渡り部で、底部は直径1cm大の孔が10数個あけられ、露受けの溝が上部内面にめぐらされており、緩やかな傾斜がつけられ長い口を通して流れ出るようにしている。寛永年間に出された「花の露」という香水は、この中段にバラの花びらを入れ、蒸気を通してその露を受け、これに香料を加えてつくられたものである。当時蘭引きを用いた人は医者や一部の商人などであるが、量的にはさほど数多くは流通していなかったようである。

カヨウ地区の地形は、階段状の緩斜面を利用し、後世に開発が行われ現在の地形になったと考えられる。すぐ東側に地元の人が「塩道」と呼ぶ古道があり南北に通じている。また、調査区の西側上手には小さな水源があり、谷水となって流れ出すことからこれら溝状遺構は用水路として使われていた可能性もある。1号溝は出土遺物から中世の段階には存在したと思われ、2号溝は鍵状に曲がっていることから何かを区画する溝とも考えられる。掘立柱建物遺構は1号・2号溝に対して直角の位置にあり、溝に伴うものとも考えられるが不明である。遺物から少ないながらも中世～近世、現代にかけてのものがみられる。

真萱の上地区は最も標高の高い場所に位置し、スポーツ公園の一方平遺跡に近く古くから安定した立地にあり、今回の調査では主だった遺構はわずかであったが、石器や礫群が確認された。また弥生土器も出土していることから、向原西地区やカヨウ地区よりも古い時期に旧石器時代以降人々の生活のうかがえる遺跡である。

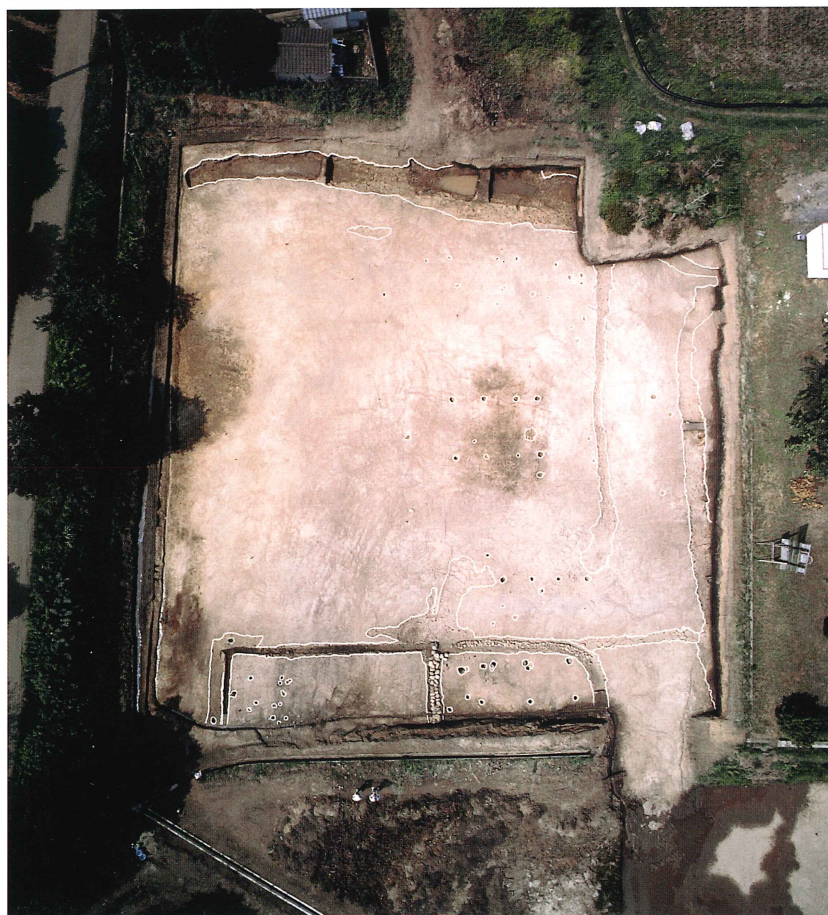
参考文献 「ふるさと松岡」大分市立松岡小学校1990年 「理容・美容学習事典」1968年度版
「外来語事典」角川書店1981年 「アルコールと栄養」光生館 1992年

写 真 图 版

写真図版 1



C・D・E区
(西から)



D区全域

写真図版 2



9・10・11号溝
と建物3・4・
5の一部

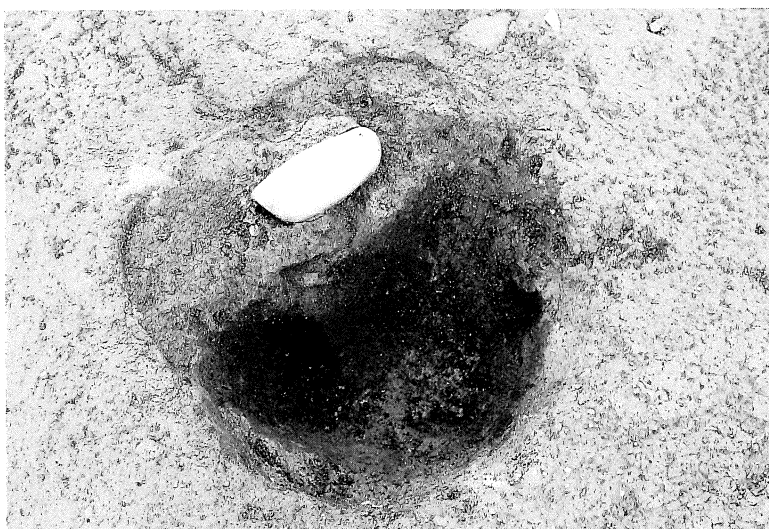


F区全域

写真図版 3



8号溝
a・b完掘状況

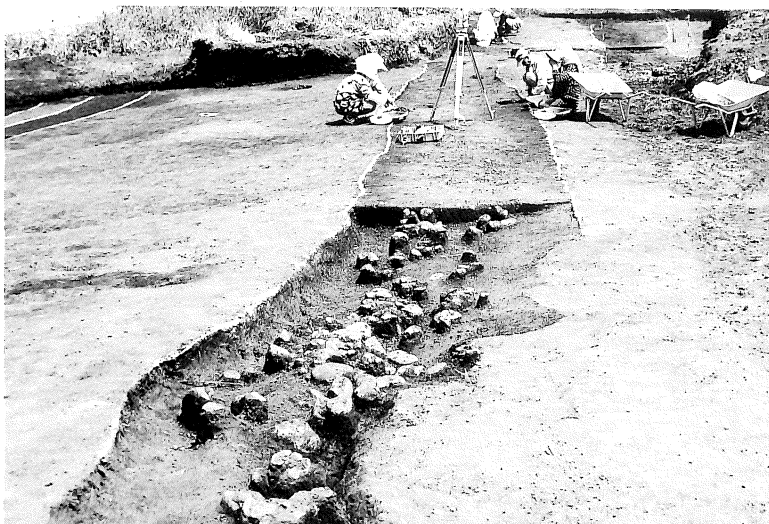


建物6
土鍾出土状況

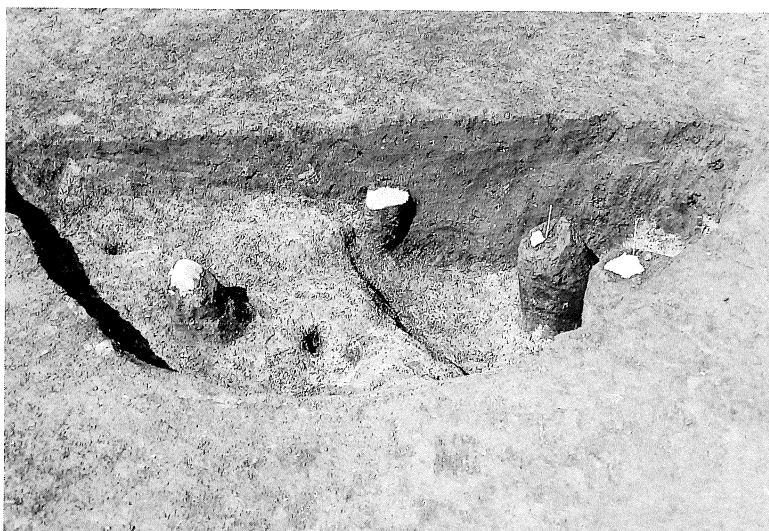


2号土坑

写真図版 4



向原西地区
3号溝 (西から)



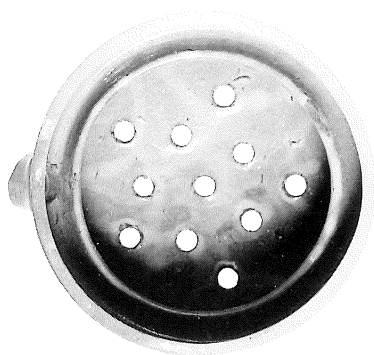
向原西地区
1号土坑遺物出土状況



カヨウ地区
1・2号溝 (西から)

遺物写真 1

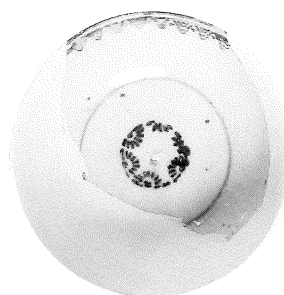
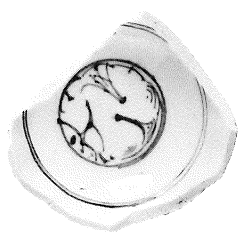
向原西地区 C区 3号土坑出土 (32~53)



32

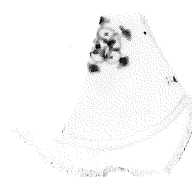
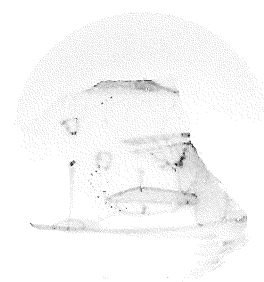


33



37

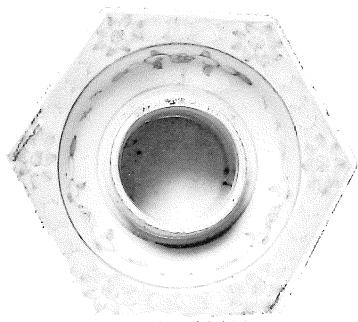
39



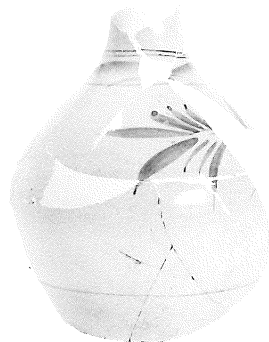
42

45

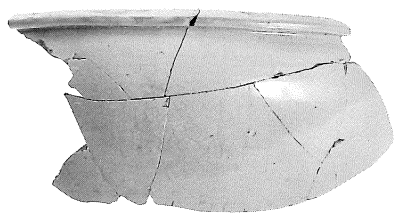
遺物写真 2



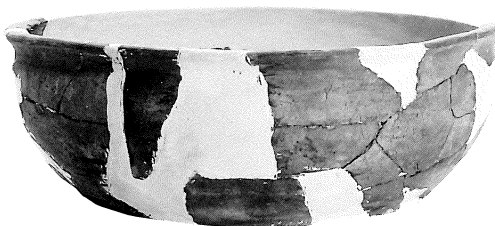
46



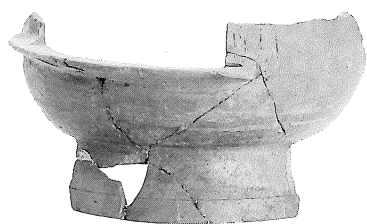
47



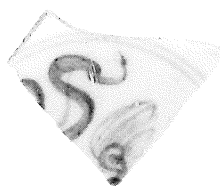
49



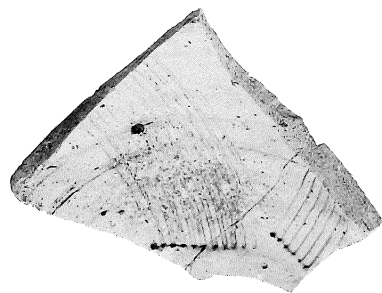
50



53



カヨウ地区
2



カヨウ地区
4



真萱の上地区
2

報 告 書 抄 録

フリガナ	マカヤイセキグン
書名	真萱遺跡群
副書名	国道197号南バイパス道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県文化財報告書
シリーズ番号	第144輯
編著者名	井川 泰成
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-0021 大分市府内町3丁目10番1号 〒870-1113 大分市大字中判田ビワノ門1977番地 大分県文化財資料室
発行年月日	2002年3月29日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
真萱遺跡群	大分市 松岡	442011	322168	33° 11' 00"	131° 40' 12"	平成11年5月10日 ～ 平成12年5月19日	7,000m ²	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
真萱遺跡群	生活遺跡	中世 近世以降		溝14条 掘立柱建物18 棟 土坑3基		土錘 中近世土器		

真 萱 遺 跡 群

国道197号大分南バイパス道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成14年 3 月29日

発 行 大 分 県 教 育 委 員 会
印 刷 い づ み 印 刷 株 式 会 社